昭和日本の『ルバイヤート』

杉田英明

［目次］

一　堀井梁歩譯『波斯古詩四行詩集』
二　堀井梁歩譯『波斯古詩異本留盃邪土』
（1）リスター『ルバイヤート外典』より
（2）ウーズレー写本より
（3）エマソン訳
三　森亮譯『ルバイヤット――オーマー・カイヤムの四行詩』

一　堀井梁歩譯『波斯古詩四行詩集』

大正からの改元（一九二六年十二月二十五日）以降、太平洋戦争の終結（一九四五年八月十五日）までの昭和前期には、少なくとも三種類の『ルバイヤート』訳が書籍の形で発表されている。そのうちで最も早いのが、堀井梁歩（本名は金太郎。一八八七―一九三八年）によるオマール・カイヤム原作『波斯古詩四行詩集』（私家版、一九三六年二月）[1]であろう。

梁歩は秋田縣河邊郡仁井田村（現秋田市仁井田区）の大農・堀井総本家の三左衛門の長男として生まれ、秋田中學で青柳有美（本名は猛。一八七三―一九四五年）に英語を学んだ。[2] 一九〇六年九月、第一高等學校英法科入学、新渡戸稲造（一八六二―一九三三年）校長のカーライル Thomas Carlyle（一七九五―一八八一年）講義を熱心に聞くと同時に、徳冨蘆花（本名は健次郎。一八六八―一九二七年）の知遇を得、ホイットマン Walt Whitman（一八一九―九二年）やエマソン Ralph Waldo Emerson（一八〇三―八二年）、ソロー Henry David Thoreau（一八一七―六二年）などの著作に親しんだという。翌年八月に退学後は、帰郷して村役場の書記を務めたり、北海道の農場に開墾実習に赴いたりしたのち、一九一二年四月にイギリスを経由して渡米、ミズーリ州立大学農科に在籍するものの、一四年三月、一年余りで退学、一五年九月に帰

国する。再び故郷で農場の開発と経営、農民新生運動に尽力するが、理想のみ高く実務能力に欠けるため失敗を重ねた。再度の短期渡米を挟んで『蘆花全集』の刊行に協力する目的で上京し、その後三二年四月に友人の勧めで朝鮮へ移住。京城郊外で農場を経営するが、妻と二児を相次いで失って酒に溺れ、總督府圖書館に嘱託として短期間勤務したのち、胃癌のため五十二歳で歿した。

著作には、農民運動の理念とその実践を中心に扱った次の三冊がある。

・堀井金太郎『土の精（筆と鍬 第三）』第三帝國社、一九一六年一月（扉の著者名は「梁歩吟客」）。
・堀井金太郎『農民新生への道――汎農民同盟の話』平凡社、一九二六年二月。
・堀井梁歩『大道無學』平凡社、一九二六年十月。

このうち最後の『大道無學』には、彼の個人雑誌『大道』[3]掲載の評論や文学作品が集められ、ホイットマンの詩「大道」The Open Road（『草の葉』*Leaves of Grass*, 第二版〔一八五六年〕所収）の全訳が巻頭に掲げられている。また、ホイットマンの『草の葉』訳とソローの評伝としては、以下の諸著（三冊目は歿後刊）を残した。

・ホイットマン著／堀井梁歩譯『草の葉』春秋社、一九三一年二月（奥付の訳者名は「堀井金太郎」。原文・翻訳対照、横組み）。
・堀井梁歩著／江渡狄嶺跋『野人ソロー』不二屋書房、一九三六年六月（雑誌『社會及國家』に「野人ソロー傳」[4]として連載した論考の集成）。
・W・ホヰットマン／堀井梁歩譯『草の葉――自己の歌』春秋社松柏館、一九四六年五月（堀井訳「自己の歌」Song of Myself――『草の葉』に「我自らを歌ふ」として収録されていた翻訳の改訂版――と宮崎安右衛門「ホヰットマンを語る」を収む）。

『草の葉』は、原文に忠実で直訳に傾きがちな従来の邦訳を「字引をかけて讀む原書以上に讀みづらい、解らないもの」と批判し、「解る、解らないは文字の問題ぢやないもの。同じ鍋のものをつツつき、同じ盃を口づけに飲む仲間に入れるかどうかの問題なんだ」[5]と宣言した結果、ホイットマンを「自分と同類の田夫野人に仕立てて身近にたぐりよせ、その言葉をいわば酒気まじりの日本語に移しかえた、まことに自由闊達な「創訳」」（亀井俊介）[6]になっていると評される。

ホイットマンやソローへの心酔の後、現実の生活において悲嘆の極にあった彼の心を捉えたのが、現世の無常を詠み酒を讃えた『ルバイヤート』であった。『波斯古詩四行詩集』末尾に付された「因縁」によると、彼が最初に手にした『ルバイヤート』は、京城移住の前後、友人の農本思想家・江渡狄嶺（えとてきれい）（本名は幸三郎。一八八〇―一九四四年）の書棚に見つけた「うすい袖珍本」[7]だったという。これは間もなく紛失したが、その後京城の古書店で、「日本字でフイツゼラルド文集と貼紙されたがつちりした本が二冊

紐でゆはへられてあるのを見つけ」、中身を見ると「果然開卷第一ルバイヤットが出て來」て、「初版と第四版とを一ページ毎に對照さして」あった。当時の彼にとっては高価で、ようやくのことで入手したというこの書物は、二冊本の『エドワード・フィッツジェラルド著作集』[8]であったろう。これが彼の翻訳の底本になる。

これと同時に、翻訳の第二の動機となったのが、やはり京城の古本屋で偶然手にした竹友藻風譯『ルバイヤット』への批判である。

（前略）是れはと驚き呆きれざるを得ませんでした。そして又いかにも學校あたりでやりさうな飜譯の手法であるに肯き（うなず）、果てはこうした（ママ）人達に依ってこうした（ママ）流義（ママ）に依つて長いこと教授さるゝ學生達に思を馳せ、（中略）思は寧ろ語學全體の問題、もつと根本の教育の本質の問題に、より多く馳せるといふ始末でした。

（中略）私の見る所では此譯者先生は確にルバイヤットの大部分の意味を讀取れなかつたと斷定して憚りません。只單に横の文字を縦に直し、且つルバイヤットの四行詩たることに拘泥して、韻も律も頓とお構ひなく、散文にもならない鴟的文句の綴を勝手放題に四行にぶツ切つてそして見た目だけ詩らしくしようとしたに過ぎぬものゝやうです。[9]

これは、堀井がホイットマンの詩について先行訳を批判したのと共通する態度である。その上で、彼が考えるあるべき翻訳について、「飜譯は決して字句ではありません。根本の思想そのものです」と述べて、次のように記す。

（前略）自分で苦勞に苦勞を重ねて一朝ハハアと了解するあの快味は正に禪の悟りにも似たものと思ひます。さうした凉風一味の快は今の學校でやるいかなる學問にも學課にもないんだから困つたものです。

（中略）初は何でもかでも意味のハツキリすることを求めなくてはなりません。意味さへ摑めたら動詞がどうの前置詞がどうのといふことは問題じ（ママ）やないのです。ハツキリと意味を摑む習慣がつくと、その後になつてから自づから一字一句を苟もしない必要が生じて來るのです。

（中略）フ氏（フィッツジェラルド）のルバイヤットは私に飜譯といふものに對する見解をハツキリさしてくれました。即ち飜譯は取りも直さず創作であることを。[10]

これもまた、ホイットマン詩における「創訳」の主張と軌を一にする。かくて彼は「此本をどうしても京城から出すことに或る不可抗の促迫を感じ」、自分の著作中で「一番後まで遺るものは恐らく此本ではないか」[11]とまで断言するのである。たんなる学術的関心のみではなく、詩に表わされた世界観や人生観への深い共鳴に基づいた創造的訳詩という点で、堀井訳はこれまでの邦訳には見られなかった独自の位置を占めている。

全部で百歌から成る文語体の訳詩は、［**表1**］に示した通り、フィッツジェラルド訳の初版と第四版から適宜選択され、新たな歌番号を付されている。そのうちの第九十八歌のみは、原典との対応が見られないので堀井の自作と思われる。訳しぶりを窺うため、例によって初版第11歌と第四版第8歌の訳（堀井訳の番号は第十二歌と第八歌）を見本として掲げてみよう。

南風吹き通ふ樹蔭、
一塊のパン、一壺の酒、一巻の詩、
然り而して側に歌ふいましあらば、
曠野こそ即今樂土。

Here with a Loaf of Bread beneath the Bough,
A Flask of Wine, a Book of Verse — and Thou
Beside me singing in the Wilderness —
And Wilderness is Paradise enow.(12)

バビロンとナイシャプルは問はずもあれ、
盃はいとあまく、よしにがくもあれ、
生命の酒は、とくとくと湧出でゝ止まず、
生命の葉は、ほろほろと散りて止まず。

Whether at Naishápúr or Babylon,
Whether the Cup with sweet or bitter run,
The Wine of Life keeps oozing drop by drop,
The Leaves of Life keep falling one by one.(13)

たまたまこれらの二首は、いずれも堀井訳のなかでは原詩との乖離が小さく、おとなしい作品である。

前者では「樹蔭」Bough,「一塊のパン」a Loaf of Bread,「一壺の酒」A Flask of Wine,「一巻の詩」a Book of Verse,「側に歌ふいまし」Thou / Beside me singing,「曠野」Wilderness,「即今」enow,「樂土」Paradise と、訳語と原語がほぼ一対一に対応している。ただし、冒頭の訳者による追加「南風吹き通ふ」は、ペルシア詩の訳として見る限りでは違和感がある。爽やかな微風・涼風という意味では、むしろ「東風」ṣabā がペルシア詩の定型表現だからである。あえて「南風」としたのは、堀井の故郷・秋田のような北国における春の到来を想定したからだろうか。訳詩の音数は「四五三／七六六／七七六／五七」となっていて、五音や七音への拘泥はほとんど見られない。これは梁歩訳全体に通じる特徴である。その代わり、文字数が句読点も含めて九・十六・十六・九と、左右対称に並べてあるのは意図的な工夫かと思われる。組んだ文字面を四行とも揃えたり、各行で少しずつ増減させたりする操作が全百首を通してかなり多く見られるからである。(14) 対応する第二版第12歌の竹友藻風訳――「ここにして木の下に、いささかの糧、／壺の酒、歌のひと巻、――またいまし、／あれ野にて側にうたひてあらば、／あなあはれ、荒野こそ樂土ならまし。」(15)――と比べると、五・七を基調とした藻風

訳の方が歌としての流れがよいことは否めないが、「いまし」「荒野」「樂土」と、使われている措辞には多くの共通点があることも判る。

第八歌の方も、やはり原詩に比較的忠実な訳になっている。音数は「五七六・五五八・七五八・六五六」と不規則だが、原詩に合わせて各行末が「問はずもあれ」「にがくもあれ」、「湧出でて止まず」「散りて止まず」と韻を踏んでいる。第一句で「バビロン」「ナイシャプル」と固有名詞を残しているのは、梁歩訳としては珍しい部類に属する。こうした片仮名語の固有名詞や術語は、他に「スルタン」「イラム」「ジャムシット」「ダビテ」「カイヤム」「マームット」「ラマザン」[16]ぐらいしか見当たらない。これら以外の固有名詞や術語の類は、訳には反映させない[17]か、あるいは漢語等に置き換える[18]といった措置を講じている場合がほとんどである。また逆に、「とくとくと」drop by drop,「ほろほろと」one by one のような擬態語・擬音語の使用[19]は梁歩訳の特徴の一つで、訳詩の表現を生動させるのに貢献している。この歌も、藻風訳第八歌「バビロンとナイシャプウルをわれ問はず、／さかづきは苦くとも、あまくともあれ、／命の酒は雫ひまなく浸みやまず、／命の葉、ひと葉ふた葉と落ちやまず。[20]」と比べて引けを取らない出来栄えである。

では次に、堀井が批判した藻風訳と彼自身の訳とが大きく異なる例を挙げてみよう。藻風訳が五七五音を重視するあまり、措辞を過度に削ってしまった結果、意味が取りにくくなっている第二版第63歌（＝第四版第61歌）について、藻風訳第六十三歌と梁歩訳第五十八歌を並べてみると以下のごとくである。

この水を神に生るとせばいかに、
えびかづら誰か係蹄とは瀆しえむ。
祝福なり、用ゐざらめや、呪詛にて
ありとせば、――そこに入れたる者や誰。[21]

美し此液、神の作りしものならば、
誰ぞ、其蔓を係蹄と瀆すは、
恵ぞ、享けて樂しまでやは、
呪詛？さらば誰ぞこゝに置けるは。（梁歩訳）

Why, be this Juice the growth of God, who dare
Blaspheme the twisted tendril as a Snare ?
A Blessing, we should use it, should we not ?
And if a Curse — why, then, Who set it there[22] ?

藻風訳については、すでに旧稿でも触れたように、「この水」「えびかづら」がそれぞれ酒と葡萄を指すという説明がなく、「いかに」「祝福なり、用ゐざらめや」の文脈上の繋がりが理解しにくいといった難点があった。これに対し、梁歩訳は「神」「係蹄」「呪詛」といった藻風の措辞を（おそらく意図的に）踏襲しながら、原詩の“Juice”を「美し此液」、“twisted tendril”を「蔓」とすることで一編の主題を明示し、藻風訳の「呪詛にて／ありとせば」

if a Curse を「呪詛？」と疑問符の効果的使用によって簡潔に表現している。「誰ぞ」「恵ぞ」の係助詞「ぞ」は、いずれも終助詞的に強意を示し、「樂しまでやは」の「で」は口語の「ないで」を意味する打消接続助詞、「やは」は係助詞「や」と「は」が連なって反語表現を形成する。従って第三句は「恵みこそ享けて楽しまない法があろうか」といった現代語訳になろう。全体に、意味は藻風訳よりずっと明瞭である。音数は「七七五・七七・七七・三五七」と、珍しく七音を多用しているので、歌としての流れも悪くない。さらに文字数を左右対称に配置[23]し、各行末を「ば」「は」で揃えるなどの工夫も見られる。これは、藻風批判が実作に結実した一例である。

同じく藻風訳第八十七歌（＝フィッツジェラルド訳第二版第87歌）を意識しながら作られたと思われる梁歩訳第七十九歌（＝フィッツジェラルド訳初版第57歌、第四版第80歌）を紹介しよう。

陥穽、係蹄をつくりて、まよひ入る
わが道にさまたげをなす、ああ、「汝」よ。
凶命の網にとらへて、さて、われの
落ちにしは罪なりと言はむとせずや。[24]

陥穽、係蹄をつくりて、
行く道に据え置く者よ、
宿命の網をば張り置き、
落ちし者を罪といふや。（梁歩訳）

Oh Thou, who didst with pitfall and with gin
Beset the Road I was to wander in,
Thou wilt not with Predestin'd Evil round
Enmesh, and then impute my Fall to Sin？[25]

藻風訳は「さまたげをなす」のような説明語を補ってはいるが、原詩の語彙を訳語にほぼ一対一対応させ、五七五（最終行のみ五五七）の定型に収めて、意味も明瞭である。これに対し梁歩訳は、藻風訳冒頭の「陥穽、係蹄をつくりて」はそのまま借用した上で、「まよひ入る」wander in はあっさり切り捨て、さらに「わが」I,「われの」my,「「汝」」Thou といった人称代名詞が規定する詩人と相手（神）との関係を捨象し、一般論として簡潔な表現を提示する。ここでも各行の文字数を揃えて、視覚的な均衡を図っているのが特徴である。

もう一編、梁歩訳第二十三歌（フィッツジェラルド訳初版第19歌、第四版第20歌）も成功した例である。対応する藻風訳第二十五歌（フィッツジェラルド訳第二版第25歌）と併せて引いておこう。

またわれら凭りかかる河の唇をば
縁とれる、さみどりの麗しき草の葉、——
ああ、かろく凭れよ。誰かは、見えぬまに
かくなりし、あえかなる唇と知るべき。[26]

やはくさのふちどれる河の岸、
心して重くなよりそ其かみの、
あえかなる唇(くち)より萠え出でし、
そのやは草としも知らなくに。（梁歩訳）

And this delightful Herb whose living Green
Fledges the River's Lip on which we lean —
Ah, lean upon it lightly! for who knows
From what once lovely Lip [i]t springs unseen![27]

藻風の方は例によって原詩の単語を残らず掬い上げた、忠実な訳しぶりである。音数も「五五七」（第三行のみ句読点の関係で判別しにくいが、「五七五」）に揃えられている。「誰かは……知るべき」が、疑問・反語の係助詞「か」の影響を受け、推量の助動詞「べし」の連体形で結ばれた形であることは言うまでもない。

梁歩訳は、藻風訳の「縁とれる」「あえかなる唇」をそのまま利用し、四句の文字数をすべて十四に揃える視覚的な効果を狙っている。「やはくさ」「やは草」と同一の単語の表記を変えたのも、この文字数へのこだわりのためであろう。勿論、「な……そ」は動詞の連用形を挟んで、懇願を含む制止「どうか～しないでおくれ」の意味を表わす古語[28]。「其かみ」は「その昔」、「知らなくに」の「なくに」は、打消の助動詞「ず」の〈ク語法（未然形＋準体助詞「く」で用言を体言化する語法）〉「なく」に逆接の接続助詞「に」が付いた形で、文末に置いて「～ないことだなあ」と上の事柄を詠嘆的に打ち消す表現[29]である。これは、「飜譯は取りも直さず創作である」という梁歩の宣言のよい実践例と言えよう。

これまでの例からも窺われるように、梁歩訳は藻風訳の表現をそのまま、あるいはわずかに改変する形で採り入れる[30]と同時に、藻風が原詩に忠実になるあまり拘泥した煩瑣と思われる細部は大胆に切り捨て、ときには原詩にない独自の表現を追加[31]して、全体に簡潔な、理解しやすい訳文を目指している点に特徴がある。小心翼々たる藻風訳に比べると、「言葉」よりは「心」を写そうとした翻訳とも言いうるだろう。ただし、原詩と意味が食い違う明らかな誤訳[32]がいくつか見られるほか、改変が意図的なのか誤訳なのか判断がつきにくい曖昧領域に属する場合[33]も少なくない。

本書刊行の三か月後には梁歩の知友が集まって、「にせあかしやの花の香をむせぶ程嗅ぎつつ、（京城の）清和園で「ルバイヤッド(ママ)の會」なるものを催した[34]」が、京城で刊行された限定二百部の私家版ということもあって、日本本土で広く流布するには至らなかったようだ。

二　堀井梁歩譯『波斯古詩異本留盃邪土』

『波斯古詩四行詩集』を寄贈した関係者の一人、臺北帝國大學教授の矢野峰人（本名は禾積(かづみ)。一八九三―一九八八年）からの「ハガキにロンドンのポッター氏の名前を書して、餘りがあつたら二冊送つ

てほしいといはれ[35]」たのがきっかけとなって、梁歩は有名な『ルバイヤート』蒐集家のポッター Ambrose George Potter（一八六五―一九五二年）と文通するようになり[36]、彼からさまざまな書籍や資料を次々と寄贈された。そのなかで、一九三七年夏に送られてきたのが「異訳の稿本――アポクリファル・ルバイヤット（Apochriphal Rubáiyát）[37]」だったという。これは、リスター Henry Bertram Lister（一八六九年―?）[38]の『ルバイヤート外典』*The Apochryphal Rubaiyat* (San Francisco: La Boheme Club, 1937)[39]のことであろう（**図版**）。「アポクリファ」apocrypha とは、元来はヘブライ語『旧約聖書』正典から外れた古代ユダヤ教文書や、初期キリスト教会によって『新約聖書』正典から異端として排除された文書を指すが、ここでは、翻訳・重訳の過程で本来とは異なる姿を呈するに至った――実際上はほとんど創作に近い――四行詩群をこう呼んだらしい。同郷の相場信太郎によると、本冊子を手にした梁歩は、

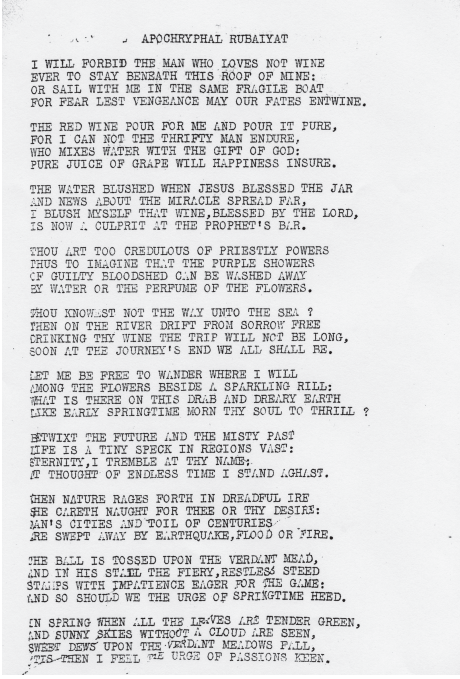
（前略）よみもてゆくと、宛ら符節を合はすが如くカパッ〳〵と吻合するものがあつて、是こそ本当のオマールぢやと、思はず歓呼の声を挙げた程です。フイツジエラルドのやうな美辞麗句も又言葉の上の彫琢諧調も乏しいが、何ともいへぬ素朴明快な中に、紛ふ方なきオマールの真髄が実にリアルに、赤裸々に顕はれてゐるのが、愉快で堪りませんでした。[40]

と記して欣喜雀躍し、十月に図書館を辞職したのちは自宅に籠もって「異本」からの翻訳に専念する。

ふと暗誦するほどに覚えたアポクリファルの句が浮んでくる。それと共にヒョイと母語の恰好な訳まで思ひ浮んでくる。たまに快心の訳があると、嬉しくて有り合ふ何かの紙片れに書き留めずに居られない。／それを又牛のやうに反芻してると、其日一日嬉しい気分になれる。[41]

こうして纏めた訳稿が、一九三八年一月、全百一首を収めた『波斯古詩異本留盃邪土』[42]百部限定の和装本私家版として刊行された。

本書とリスターの原著『ルバイヤート外典』との対応関係を示した［**表2**］に見る通り、梁歩はリスターの百十首のうち九十



APOCHRYPHAL RUBAIYAT

I WILL FORBID THE MAN WHO LOVES NOT WINE
EVER TO STAY BENEATH THIS ROOF OF MINE:
OR SAIL WITH ME IN THE SAME FRAGILE BOAT
FOR FEAR LEST VENGEANCE MAY OUR FATES ENTWINE.

THE RED WINE POUR FOR ME AND POUR IT PURE,
FOR I CAN NOT THE THRIFTY MAN ENDURE,
WHO MIXES WATER WITH THE GIFT OF GOD:
PURE JUICE OF GRAPE WILL HAPPINESS INSURE.

THE WATER BLUSHED WHEN JESUS BLESSED THE JAR
AND NEWS ABOUT THE MIRACLE SPREAD FAR,
I BLUSH MYSELF THAT WINE,BLESSED BY THE LORD,
IS NOW A CULPRIT AT THE PROPHET'S BAR.

THOU ART TOO CREDULOUS OF PRIESTLY POWERS
THUS TO IMAGINE THAT THE PURPLE SHOWERS
OF GUILTY BLOODSHED CAN BE WASHED AWAY
BY WATER OR THE PERFUME OF THE FLOWERS.

THOU KNOWEST NOT THE WAY UNTO THE SEA ?
THEN ON THE RIVER DRIFT FROM SORROW FREE
DRINKING THY WINE THE TRIP WILL NOT BE LONG,
SOON AT THE JOURNEY'S END WE ALL SHALL BE.

LET ME BE FREE TO WANDER WHERE I WILL
AMONG THE FLOWERS BESIDE A SPARKLING RILL:
WHAT IS THERE ON THIS DRAB AND DREARY EARTH
LIKE EARLY SPRINGTIME MORN THY SOUL TO THRILL ?

BETWIXT THE FUTURE AND THE MISTY PAST
LIFE IS A TINY SPECK IN REGIONS VAST:
ETERNITY,I TREMBLE AT THY NAME:
AT THOUGHT OF ENDLESS TIME I STAND AGHAST.

WHEN NATURE RAGES FORTH IN DREADFUL IRE
SHE CARETH NAUGHT FOR THEE OR THY DESIRE:
MAN'S CITIES AND TOIL OF CENTURIES
ARE SWEPT AWAY BY EARTHQUAKE,FLOOD OR FIRE.

THE BALL IS TOSSED UPON THE VERDANT MEAD,
AND IN HIS STALL THE FIERY,RESTLESS STEED
STAMPS WITH IMPATIENCE EAGER FOR THE GAME:
AND SO SHOULD WE THE URGE OF SPRINGTIME HEED.

IN SPRING WHEN ALL THE LEAVES ARE TENDER GREEN,
AND SUNNY SKIES WITHOUT A CLOUD ARE SEEN,
SWEET DEWS UPON THE VERDANT MEADOWS FALL,
THEN I FELL THE URGE OF PASSIONS KEEN.

『ルバイヤート外典』1頁

六首を訳している。またそれ以外に、第九歌には「（カウル譯より）」、第三十九歌と第六十歌、第六十七歌には「（エマーソン譯）」、第九十一歌に「（ボドレアン稿本から）」と付記があり、これらはリスター原著からとは別に訳されたことが判る。

（1）リスター『ルバイヤート外典』より

リスター原著におけるルバーイー百十首はすべて、フィッツジェラルド訳と同様の弱強五歩格（iambic pentameter）で aaba の脚韻構成を取っている。類似した詩想の作品をひとまとめに配置している以外、その排列順序に統一原理があるわけではなく、また各歌の出典や訳者名も示されてはいない。ペルシア語のルバーイーに共通する詩句が見出せる場合[43]はごくわずかにすぎず、多くは四行詩の詩形を借りた創作――リスターの言う「親のない四行詩」Orphan Quatrains――であろう。見本として、まず第一歌と第百一歌を原詩とともに掲げてみよう。

酒のまぬおのこ（ママ）は好かぬかな
同じ屋根の下に寝（いね）たうもなし
同じ方（はこ）舟に乗り合ふもうし
ひたすらに怕（おそ）るゝ後の崇（ママ）りかな[44]

I will forbid the man who loves not wine
Ever to stay beneath this roof of mine:
Or sail with me in the same fragile boat
For fear lest vengeance may our fates entwine.（第一歌）

殘ンの樂ぞ最も尊貴なれ
怖なく旅の終に近づけよ
涙なく別離を告げよ
冗語（ことば）なく行く途（て）に就けよ[45]

The joys remaining count most precious — dear
Pass to the journey's end without a fear:
Bid life a fond farewell without a tear
And go thy silent way on leaving here.（第百十歌）

第一歌の原詩は「酒を愛さぬ男には、わが屋根の下に留まることも、同じ脆弱な舟で一緒に航海することも私は禁じよう。報復が我らの運命を複雑に絡ませることを恐れるから」が直訳。飲酒のために自分が死後に罰を受けるとしても、同じ家で暮らしたり同じ舟で旅をしたりしたというだけの理由で仲間に迷惑をかけることは避けたいという意味であろう。「酒のまぬおのこは好かぬかな」という言葉は原文には明示されていないが、これをあえて一行目に置いたことで一首全体の印象が格段に強まった観がある。各行末を「かな」「なし」「うし」「かな」と韻を踏む形にして、最終行を「ひたすらに怕るゝ後の崇（ママ）りかな」とまとめたのは巧みである。原詩でたんに「脆弱な舟」fragile boat とあるのをあえて「方（はこ）舟」と訳したため、これが一種の運命共

同体の象徴であるかのごとき印象を与える効果が生まれた。これに対し、第百一歌はほぼ原詩に忠実な訳で、内容が一種の辞世の歌になっている。リスターも梁歩も、意図的にこの歌を末尾に据えたのであろう。原詩は四行とも同じ脚韻を持ち、“without”を二回繰り返すのに対し、訳詩では第一行以外の末尾を「よ」で統一し、「怖なく」「涙なく」「冗語(ことば)なく」と同音反復を利かせ、五音と七音を交錯させた歌の流れも悪くない。

他方、第五十四歌のように、梁歩が大幅に改変した例も見出される。

賢者は酒を友とし善し
神機妙算、湧いて泉の如く
爐邊山中、携へて老妻の如し
達人は遂に酒に隠るゝものか[46]

Wine is the admiration of the wise:
At wine's command a host of visions rise:
Wine is a comrade, helper, leader blest:
Glory of purple grape, thy charm I prize[.]（第六十一歌）

（酒は賢者の称讃品／酒の命令で多くの幻影が浮かび上がる／酒は同僚、援助者にして祝福されたる指導者／紫の葡萄の栄光よ、汝の魅力を私は讃える）

「多くの幻影」a host of visionsを「神機妙算」（人間には推し量れない優れた計略）という典故のある四字熟語[47]に置き換え、これに対置する形で「爐邊山中」を導き出すとともに、「同僚、援助者にして（中略）指導者」a comrade, helper, leaderは「老妻」の一語に集約する。その結果、全体は漢詩の訓み下しのごとき趣きとなり、四行目は原文とはまったく異なる梁歩自身の言葉に変じている。これも「創訳」の一例であろう[48]。一部に誤訳や説明の必要な言葉があるものの[49]、全体を通して見ると、リスターの原詩を踏まえつつ独自の味付けを施している場合が多いようである。

（2）ウーズレー写本より

これに対し、典拠が示された五首は、いずれもこれまで日本で紹介されたことがなかった点で貴重である。例えば第九歌は以下のごとくである。

二缺のパンと此世の一隅
榮耀と榮華は我願に非ず
心魂を傾けて購ひし貧よ
貧の中にこそ不盡の富を發見したれば[50]

「二缺」にはルビがないが、おそらく「ふたかけ」と読むのであろう。「カウル譯より」のカウルとは、フィッツジェラルドEdward FitzGerald（一八〇九―八三年）をペルシア語の世界へと導いた年下の友人カウエルEdward Byles Cowell（一八二六―一九〇三年）である。その英訳は『カルカッタ・レヴュー』に匿名で掲載

したウマル・ハイヤーム ʻUmar Khayyām（一〇四八―一一三一年）に関する論文中の第十五番目の例として見出される。

Of all the world my choice is two crusts and a corner,
I have severed my desires from power and its pomp;
I have bought me poverty with heart and soul,
For I have found the true riches in poverty.[51]

カウエルが依拠したのは、ボドレー図書館のウーズレー写本（MS Bodley No. 525; Ouseley Collection No. 140）と、カルカッタのベンガル・アジア協会図書館所蔵の五百十六首を含む写本（No. 1548. 原本は失われ、カウエルがフィッツジェラルドのために筆写した複製のみが残る）であった。右の作品はウーズレー写本の第百十九番に対応する。

konj-ī-yo do qorṣ az jahān be-gzīdam
va-z dowlat-o ḥeshmat-ash ṭamaʻ be-brīdam
darvīshī-rā be-jān-o del be-khrīdam
dar darvīshī tavāngarī-hā dīdam[52]

世界から片隅と二塊のパンとを私は選んだ
そしてその財産と豪奢とから欲望を切断した
魂と心とで私は貧困を買い取り
貧困のなかに富を見出した

カウエル訳は第四句の「富」tavāngarī を“true riches”と説明的に訳し、“For”によって理由を示す形にしているが、全体としてはペルシア語原詩にほぼ忠実で、梁歩訳もこれに従っていることが判る。「片隅」や「隅っこ」ではなく「一隅」a corner / konj-ī という訳語を選ぶに当たっては、当時最澄（七六七―八二二年）の言葉として人口に膾炙していた「一隅を照らす、此則ち國寶[53]」の文言も念頭にあったかもしれない。

第九十一歌も「ボドレアン稿本から」とあるように、同一の写本の第一歌に基づいている。

ずぼらな性分から、俺ア
善も悪もいけぞんざいに緡したか知れないが
是丈は最後の日の言譯にならう
一を二とは斷じて讀み違へなかつた[54]

If I myself upon a looser Creed
Have loosely strung the Jewel of Good deed,
Let this one thing for my Atonement plead:
That One for Two I never did mis-read.[55]

このペルシア語原詩は以下の通り。

gar gowhar-e ṭā‘at-at na-softam hargaz

gard-ē gonah-az chehre na-roftam hargaz
bā īn hame nowmīd na-yam az karam-at
z-ān rū ke yekī-rā do na-goftam hargaz[56]

私があなたへの服従の真珠に決して穴を穿たず
罪の埃を顔から決して拭い去らなかったとしても
それらすべてにも拘わらず私はあなたの寛大さに絶望して
　はいない
なぜなら私は決して一を二とは言わなかったから

「真珠に穴を穿つ」gowhar softan とは、糸を通して頸飾りを作る、すなわち作詩すること。「あなた」が神を指すとすると、第一句は「私が決して神を讃える詩句を作らなかったとしても」という意味になる。「罪の埃を顔から拭い去る」とは偽善者になること。また「一を二とは言わない」とは、神の唯一性を疑問視しない、多神崇拝をしないことの婉曲表現。ウーズレー写本の第一・第二歌はそれぞれ -az, -āz と z（zāy）の文字で終わるにも拘わらず、詩集全体の排列原理（末尾の文字のアルファベット順）を無視して冒頭に置かれている。これは、フィッツジェラルドが述べるように、多神崇拝の非難を回避し、自らの行為を正当化するための写字生の配慮であろう。

フィッツジェラルドの英訳をペルシア語原文と比べると、「罪の埃を顔から決して拭い去らなかった」を「より杜撰な信条に基づいて」upon a looser Creed,「服従の真珠に決して穴を穿たず」を「善行の宝石を糸で緩やかに繋いだ」Have loosely strung the Jewel of Good deed,「寛大さに絶望してはいない」を「この一事にわが贖罪の言い訳をさせよ」Let this one thing for my Atonement plead のように、細部に拘泥せず、原文の意図を自らの言葉で再創造していることが判る。ただし、最終行の「一を二とは言わなかった」を「一を二と誤読しなかった」One for Two I never did mis-read と訳したのは、脚韻を揃えるための都合とはいえ、原義からはやや逸脱している。

梁歩訳はこの英訳をさらに自由に「創訳」している。「より杜撰な信条に基づいて」を「ずぼらな性分から」、「善行の宝石を糸で緩やかに繋いだ」を「善も悪もいけぞんざいに緡（さ）した」など、「ずぼら」「いけぞんざい」といった口語的な砕けた表現は、「俺ア」などとも相俟って、詩人自身がすでに酩酊しているかのごとき印象さえ与える。「緡（ビン）」は釣り糸、ないし銭を貫く縄が原義だが、紐を通した銭の束を数える単位として「さし」の訓があるので、これを動詞化して「糸を通す」「挿す」意味で「緡（さ）す」という宛て字を考案したのであろう。しかしこれだけは、元になった英訳を知らない読者には意味が通じがたい憾みがある。

（3）　エマソン訳

「エマーソン譯」と注記のある三首は、アメリカの思想家・詩人エマソンがオーストリアの東洋学者フォン・ハンマー Joseph von Hammer（一七七四―一八五六年）のドイツ語訳から行なった重訳に基づいている[57]。ただし、第三十九歌「二つの日は我墓の

上に交代せず／許されし日、定められし日／前者には狐疑なく逡巡なく／後者には遅滞なく異議なく」[58]は、ウマル・ハイヤームではなく、ブワイフ朝下のレイの町で活動した詩人ピンダール Pindār Rāzī（一〇一〇年歿）に帰せられる作品[59]である。エマソンが自らの詩集に収めるさい、“From Omar Chiam” として引用した作品の直後にさらに二つの別の詩人の作品を（詩人名を付さずに）続けた[60]ため、この詩もハイヤーム作と誤解されたのであろう。

残りの二首のうち、第六十歌とエマソンの原詩は次のごとくである。

娑婆の往還を満足して
行き切るものは只兩人（ふたり）
許されし事、許されぬ事を納得する人
智識から遠ざけられた人[61]

On earth’s wide thoroughfares below
Two only men contented go:
Who knows what’s right and what’s forbid,
And he from whom is knowledge hid.[62]

エマソンの英訳は、『文学と社会的目的』（一八七六年初刊）に収められた「ペルシアの詩」のなかで、ウマル・ハイヤームの警句詩として紹介されており、その典拠となったのがフォン・ハンマーのドイツ語訳であった[63]。ハンマーが主として依拠したダウラトシャーの『詩人伝』にはウマルの詩の引用が皆無であるにも拘わらず、彼は二百首のルバーイーを含む架蔵の写本から見本として二十五首を訳しており、その二十三番目[64]が右の詩の原詩に対応する。写本の出自や現在の所在が不明でペルシア語原詩を参照しえないため、訳自体の当否については判断できないが、エマソンは、ハンマー訳の「無限の領域」der unendliche Bezirk hienieden を「広い公道」wide thoroughfares,「善悪」was gut und bös ist を「正しい事柄と禁じられた事柄」what’s right and what’s forbid——これは “forbid” “hid” と脚韻を踏む関係であろう——と、多少意訳している印象である。梁歩訳はエマソン訳にほぼ忠実だが、「現世」と言うべき箇所にわざわざ「娑婆」という、佛教用語ながら俗語的な表現を使用しているところがいかにもこの訳者らしい。

第六十七歌もやはりハンマーのドイツ語訳第二番からのエマソン英訳に基づいている。

扉を開いてお呉れ、あなたは番人ですもの
行く途を示してよ、先達ですもの
海圖やパイロットには信頼がおけませんもの
變る者です、彼等（あれら）は、不變者（かはらぬもの）はあなたですもの[65]

Unbar the door, since thou the Opener art,
Show me the forward way, since thou art guide,

I put no faith in pilot or in chart,
Since they are transient, and thou dost abide.[66]

梁歩はここでもエマソン訳を忠実に訳してはいるが、「海圖やパイロット」in pilot or in chart はペルシア詩にはいささかそぐわない。これは、エマソンがハンマー訳の「私はわが手をいかなる先達の手にも委ねない」Ich lege meine Hand in keines Führers Hand を意訳し、“art” と脚韻を踏ませるため “chart” を用いたことによる。“pilot” は「水先案内人」の意味であろうが、これを「パイロット」と和訳すると、飛行機の操縦士を想起しかねない点は問題であろう。

当時、京城帝國大學法文學部教授で梁歩とも親交のあった安倍能成（一八八三―一九六六年）は、その温情の籠もった追悼文のなかで『波斯古詩異本留盃邪土』について次のように記している。

（前略）前譯には「留盃耶土（ママ）」と宛字をしたが、今度は「邪土」と改めた。意味は結局どうなるのか、「盃を邪土に留む」と讀めることは讀める。（中略）今度の譯は、所々に「エマーソン譯」とか「ホドレアン（ママ）稿本から」とかあるばかりで、解說も異本の謂れもついて居ず、その代りでもないが、紙は上等の和紙を用ゐ、表紙にも苔紙（たいし）を使ひ、活字も大きく贅澤になつて居た。さうしてこれが無一文の堀井君の自費出版である。前の譯も詩として朗々誦するに堪へたが、今度は譯としての適否は知らず、全く一つの創作として、實に縱横自在な、感興の流露に任せた、うまいものであつた。[67]

さすがに安倍は、出典が明示されている場合を除いて「譯としての適否は知らず」と、梁歩訳が本来のウマル・ハイヤーム作ないしはフィッツジェラルド訳『ルバイヤート』からは逸脱していることを見抜き、むしろ「全く一つの創作として」評価する姿勢を示している。[68] 同じ追悼文によれば、今回もまた、安倍の肝煎りで第二回「留盃邪土の會」が天香園という京城の朝鮮料理店で開催されたというが、限定百部の自費出版だっただけに、この訳書がやはり本土に広く知られるには至らなかった。

ところがその後、本書は意外な運命を辿ることになった。一九四七年五月に東京で復刊本が出されると、それを作家・太宰治（本名は津島修治。一九〇九―四八年）が入手、遺作『人間失格』のなかに梁歩訳十一首を引用したのである。[69] この小説は主人公の大庭葉藏が残した三つの手記を、小説家の「私」が紹介するという枠構造を取っている。その「第三の手記」で、主人公は「上司幾太（情死、生きた）」という変名で雑誌に漫画や挿絵を描き、そこに「ルバイヤットの詩句」を挿入するのがつねだったという設定になっている。ただし太宰は、この引用の出典を明示せず、「ルバイヤット」とのみ記したため、一般読者はこれがウマル・ハイヤームの『ルバイヤート』からの引用だと誤解したことだろう。妻の津島美和子（一九一二―九七年）によれば、「最後の机辺に遺された」五冊の本のなかに、寄贈本の梁歩訳が含まれていたということである。[70] 同書冒頭の肖像写真に添えら

れた「生死からの自由の外に／自由といふものはなし」「死ぬにきまつた此身也／man is mortal」「生まれたことがしまつたこと也」という梁歩の筆蹟も、太宰の共感を呼んだに違いない。

三　森亮譯『ルバイヤット――オーマー・カイヤムの四行詩』

『波斯古詩異本留盃邪土』刊行の翌一九三九年二月から四月にかけ、英文学者の森亮（一九一一―九四年）によるフィッツジェラルド訳初版七十五首の全訳「ルバイヤット――オーマー・カイヤムの四行詩」が雑誌『コギト』に連載[71]され、一九四一年六月に東京の出版社より、フィッヂェラルド／森亮譯『ルバイヤット――オーマー・カイヤムの四行詩』（新ぐろりあ叢書20、ぐろりあ・そさえて[72]）として刊行された。大阪出身の森亮は、一九三六年に東京帝國大學文學部卒業、当時は松江高等學校（旧制。のち島根大学）教授、のち一九七二年からお茶の水女子大学教授、一九七七年から八八年まで梅花女子大学教授を務めている。

森自身の回想によると、大学卒業直後「比較的ひまな時間がもてたのを幸いにフィッツジェラルドの英訳から気に入った四行詩を幾つか」、「蒲原有明の第四版からの六篇の部分訳」を手本に文語訳しようと試みたのが『ルバイヤート』全訳のきっかけだったという[73]。『コギト』連載の前年の秋、学会のために上京した臺北帝國大學の島田謹二（一九〇一―九三年）の「勧めと仲介で[74]」、島田の同僚の矢野峰人に訳稿を読んでもらう機会もあったようだ。

単行本の「解題」のなかで、フィッツジェラルド訳の初版を底本に用いた理由を訳者は次のように述べている。

（前略）初版にはそれにふさはしい清新の筆致が見え、又四行詩の數が最も少い爲めこれを一篇の連作四行詩群として見れば最もひきしまり纒まつてゐるからである。しかし第二版も第四版もそれぞれ特色を持つた佳品で、それらを措いて特に初版を選んだのは筆者のこの版に對する偏愛にもとづくものと云つてよい。尤もその他にも理由はあつた。筆者がこの飜譯に取り掛かつた頃、第二版にはすでに竹友藻風氏の文字に忠實な韻文訳（全譯）があり、第四版には矢野峰人氏の七五調四行卽ち四十八音よりなる定型韻文譯（第三十三歌までの部分譯）があつたが、初版の全譯は未だこれを試みた人がないやうであつたからである。筆者のこの邦譯は昭和十二年の秋に一先づ完成したのであつたが、その頃臺灣の文藝雜誌「媽祖」第十五册（十二年十二月）第十六册（十三年三月）に矢野峰人氏の「波斯四行詩集」が發表された。これはフィッヂェラルド英譯「ルバイヤット」初版の全譯である。尤もこの飜譯もさきに擧げた第四版の場合と同じく七五調の定型韻文譯になつてゐる。流麗な譯詩であるが、このやうな短詩形では同氏が嘗て云はれた如く「原詩の一行の全意が邦譯の一行にうまく盛り切れないといふ事は最初から分り切つた事實」で、これで以てフィッヂェラルド英譯初版の全貌をうかゞふことはできない。筆

者がさきにその全譯を雜誌「コギト」にかゝげ、今また書物の形ちで世に出さうとする所以である。[75]

竹友藻風の第二版、矢野峰人の第四版に対し、自らは初版に基づくという役割分担の意識が働いたことは確かであろう。また、峰人訳「波斯四行詩集」はその後、奥瑪開儼作／矢野峰人譯『四行詩集』（臺北・日孝山房、一九三八年五月）としても刊行されたが、これは私家版であり、一般に流布するには至らなかったことも考慮すべきであろう。実際、森亮は戦後の口語訳[76]に至るまで、一貫して初版を底本に利用しており、訳者の「偏愛」という言葉も頷ける。

翻訳の方針については、同文中で、「譯したものに詩としての聲調を有たせること、一行一行でなく詩の單位（四行）全體に原作と同じ程度の達意さと明晰さを與へること」（一三八頁）の二点が強調されている。さらに訳者は、上梓から半世紀近く経たのち、「訳詩の方法[77]」と銘打った自作自解を発表して自らの訳詩の背景や秘密を打ち明け、その方針を「七五混交調」「意訳主義」「雅文調」の三項目に分けて説明している。以下、この論考も参照しながら具体的な訳しぶりを窺ってみよう。まず、第二―第四版の第12歌に対応する初版第11歌である。

ここにして木の下かげに歌の卷、
酒のひと壺、糧し足り、かたへに汝
よきうたを歌ひてあればものににず、
あら野もすでに樂土かな。

Here with a Loaf of Bread beneath the Bough,
A Flask of Wine, a Book of Verse — and Thou
Beside me singing in the Wilderness —
And Wilderness is Paradise enow.[78]

音数の点では「五七五／七五七／五七五／七五」と、まさに「七五混交調」のなかで五音句と七音句が交互に規則正しく排列されている。[79]表記上、原文のダッシュ（—）がまったく無視されているのは森訳全体に通じる特色[80]とも言え、原詩と訳詩との厳密な対応を期した――先に引いた森の言葉を借りれば「文字に忠實な」――藻風訳とは対照的である。音数の関係上、「歌の卷」「酒」「糧」の順番が原文の “Bread,” “Wine,” “Book of Verse” と入れ換わっているのは、「一行一行でなく詩の單位（四行）全體」に注目するという先の方針を裏付けている。「ココニシテ・コノシタカゲニ」「カテシタリ・カタヘニ」のk音の頭韻（alliteration）[81]も意図的な技法であろう。

訳語について見ると、「ここにして」はたまたま藻風訳と同一だが、『萬葉集[82]』に溯る「ここにいて」を意味する古語、「糧し足り」の「し」も「万葉集でよく使われる強意の助詞[83]」でそれぞれ訳者の言う「雅文調」を醸し出すための「古語・雅語の活用」と「古い語法・文法」に属する。一行目「木の下かげに」は、訳者によると、同じ「雅文調」の一環としての「本歌取り」を成し、

明治の国文学者・落合直文（一八六一―一九〇三年）の「余りにも有名な「青葉茂れる桜井の／里のわたりの夕まぐれ／木の下陰に駒とめて……」に拠った」[84]という。もっとも、この歌は明治末生まれの訳者には「余りにも有名」であっても、戦後の読者にはこうした自解がないと典拠に思い至らないという難点がある。他方、三行目「ものににず」は、「漢字を当てれば「物に似ず」で、似たようなものは（地上では）ちょっと見当らない――ぐらいの意味に取っていただきたい」との自解がある。これは「意訳主義」のうち「つなぎ言葉の挿入」、すなわち「文脈を整えるために原詩にないつなぎ言葉を挿入する」[85]方法の一端である。いずれにせよ、この第十一歌は全体に原詩の意をよく汲んだ優れた出来栄えになっている。

ちなみに、同じ初版に基づく矢野峰人の『四行詩集』の第十一歌は次のごとくである。

一搏飯（ママ）と側尊と
詩書一巻をともとしつ、
樹蔭にうたふ君あらば
荒野もげにや樂土なれ[86]。

森亮の「解題」にあった通り七五調定型だが、その定型に収めるのにあえて「搏飯」「側尊」[87]といった中国古典に由来する漢語を使用したため、音も意味も難解である。第四版に依拠した峰人自身の「RUBAIYAT の研究」の第十二歌「一瓢の飲一簞の／食（し）と一巻の詩書ありて／樹蔭にうたふ君居なば、／荒野もげにや樂土なれ[88]。」と比べると、同じ七五調で後半二行はほとんど同一だが、前半二行はこちらの方がずっと読みやすい。森亮訳はさらに和語を多用した柔らかな仕上がりと言えるだろう。

森亮訳と矢野峰人訳の見本をもう一首、第十一歌の一つ手前の第十歌を挙げてみよう。

畑地よりあら野をさして
いざ來ませ、草生づたひに。
このわたりスルタンも奴僕も今や名はなくて、
かのマームッド、玉座ゆゆしき王かなし。

王者奴隷のけぢめ無き、
荒野耕地をへだてつる
かぼそき小野にわれと來ね――
玉座の王をあはれめよ[89]。

With me along some Strip of Herbage strown
That just divides the desert from the sown,
Where name of Slave and Sultán scarce is known,
And pity Sultán Máhmúd on his Throne.[90]

森亮訳の「草生」some Strip of Herbage は「草原」「草の生えている場所」を意味する言葉[91]、「ゆゆしき」は「神聖で触れてはなら

ない、恐れ多い」意味の古語[92]だが、原詩に対応する言葉が存在しない「つなぎ言葉」であろう。「いざ來ませ」も――峰人訳の「來ね」と同様――原詩一行目冒頭に動詞命令形“Come”を補う心持ちで追加した、「意訳主義」のうちの「注釈的加筆[93]」と言える。「このわたり」Where は、訳者自解によれば「狂言の常套句の「これはこのあたりに住まひ致す者でござる」などの連想からか。「あたり」と言わないで「わたり」と言ったのは源氏物語・夕顔の「六条わたりの御忍びありきの頃」などを思い出したのであろう[94]」。原詩の二行目“That just divides the desert from the sown”（沙漠を耕地からちょうど隔てている）は、直訳に近い峰人の「荒野耕地をへだてつる」に比べると、「畑地よりあら野をさして」としたのはかなりの意訳である。これは、「あら野」という運動の方向、目的地を明示することで、後続の第十一歌との連続性を強調しようとする訳者の工夫であろう。実際、この目的地は第十一歌の「ここにして」という言葉で受け止められ、四行目の「あら野」によって再びその場所が確認されるのである。森はフィッツジェラルド訳の特徴について、「この四行詩群の構成は我が國近代短歌の技法である連作と非常によく似てゐる[95]」と述べているように、歌から歌への推移、相互の繋がりにとくに注意を払って訳詩を行なっているように思われる。

森亮訳を全体として概観すると、『古事記』『萬葉集』『古今和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』に始まり、能・狂言、『百人一首』を経て、夏目漱石（本名は金之助。一八六七―一九一六年）の「草枕」や坪内逍遙（本名は雄藏。一八五九―一九三五年）訳『ハムレット』、近代詩・近代短歌[96]に至るまで、日本文学全体に親しんだ訳者の素養がよく反映された作品と評することができる。とくに強く影響が認められるのは、上田敏（一八七四―一九一六年[97]）と蒲原有明（本名は隼雄。一八七五―一九五二年[98]）である。現代の読者には馴染みのない、意味の取りにくい特殊な古語が用いられている場合[99]はあるものの、典故を知らなくても訳詩を味わうことは十分可能であろう。

発表当時の森亮訳への批評はきわめて好意的であった。例えば三好達治（一九〇〇―六四年）は『コギト』連載時に「刮目して見るべき名譯」「既往の諸譯に比して一段と見まさりのする出來榮え」と讃え、いくつかの歌を引いたのち、「各章悉くこの程度の雅馴な無理のない用意の行届いた、さうして詩趣の豊かな譯しぶりなのである。近ごろ寓目した譯詩中の白眉と推すに躊躇しない[100]」と述べている。

批評家の亀井勝一郎（一九〇七―六六年）も単行本を読んで、

> （前略）四行詩のわが國における定本版としてふさはしい出來榮えといへよう。のみならずこの譯本には、森氏の懇切な解題と註釋がついてゐて、カイヤムをはじめフイツヂェラルドの譯業に關する正確な智識を得ることが出來る。譯文も典雅流暢で、朗讀すると更に美しいひゞきをつたへる。この方面における最近での一番立派な仕事だと思ふ[101]。

と絶讃する。さらに、片野文吉譯やそこに添えられた上田敏の

序文[102]を引きつつ、「無常の悲哀」「享樂の教」などの観念に則してカイヤムの詩想を叮嚀に紹介し、『萬葉集』の大伴旅人（おおともの たびと）（六六五―七三一年）の数首に言及して、彼を「日本のカイヤム」と名づける。「人生の達人の深い悲しみと瞑想」を感じさせる森訳の四行詩への共感と、これを一般読者に広く知らしめたいという亀井の熱意とがよく窺われる力の籠もった書評である。もっとも最後に、森「氏の譯は技巧の跡がそれとして目立ちすぎ、稍々理知的な感じを受ける」ので「いま一工夫あつてどうだらうか」[103]とも付け加えている。ここでの「技巧」が具体的に何を指しているのか文面だけからは明らかでないが、森が伊東靜雄から言われたという「言葉を知り過ぎてゐると、詩が書きにくいでせう」という批評、「雅語になづむな、熟語成句に頼り過ぎるな」[104]という戒めとも通底する言葉かもしれない。

最後に、若き日の三島由紀夫（本名は平岡公威（きみたけ）。一九二五―七〇年）の読後感も引いておこう。彼は友人の東健（あずまたかし）（筆名は文彦。一九二〇―四三年）宛ての一九四一年七月十日付け私信中で、

> （前略）森亮といふ人の訳はまことに流麗ですし、「解題」も親切で面白いものです。ペルシヤ人の、酒と逸楽の享楽主義は、おなじ享楽主義でも「トリマルキオーの饗宴」にみるやうな羅馬（ローマ）のそれとはちがひ、後者が機智と皮肉と頽廃とのあらはれでしかないのに、前者には東洋的な深い瞑想がみられます。前者は月夜のおもむき、後者はまひるのコロッセウムを思ひ出させます。[105]

と、『ルバイヤート』とローマの作家ペトロニウス Gaius Petronius Arbiter（六五年頃歿）の『トリマルキオの饗宴』*Cena Trimalchionis* とを比較している。ちょうど直前に刊行されたペトロニウス／岩崎良三譯『トリマルキオーの饗宴』（青木書店、一九四一年三月）[106]を読んでの感想であろう。その後三島は、折に触れて『ルバイヤート』に言及している。[107]

全体に、竹友藻風訳が英文学の専門家のあいだで評価されたのに対し、森亮訳はそうした専門領域とは無縁の読者、あるいは日本の古典文学に親しんだ読者に訴えるところが大きかったように思われる。もっとも、こうした森訳もその後長らく再刊されなかったのは、戦後、一般に文語への馴染みが薄くなり、森と同じ古典文学の素養を持つ読者層が減少していったことを考えればやむを得ない事態であっただろう。訳者本人はもとより「文語訳に執着」していたものの、戦後の一九六〇年代後半に口語訳を世に問わざるをえなくなったのは、「口語訳が求められるのは避け難い趨勢と見」[108]てのことであった。

昭和前期にはさらにいくつかの部分訳や引用・紹介が現われ、文学作品中での間接的言及も見られるようになる。これらについては紙幅の関係で別の機会に譲ることにしたい。

［注］

＊ 本文における引用文中の小字の丸括弧内は引用者による補足である。

＊ 引用文中の引用者によるルビには丸括弧を付して、原ルビと区別した。

＊ 注において筆者の旧稿「明治日本の『ルバイヤート』」（『Odysseus』第二十号、二〇一六年三月、一―三七頁）、「大正日本の『ルバイヤート』」（『Odysseus』第二十一号、二〇一七年三月、一―三七頁）および「大正日本の『ルバイヤート』（続）」（『Odysseus』第二十二号、二〇一八年三月、一―四七頁）に言及する場合は、それぞれ「明治日本」「大正日本」「大正日本（続）」と略記する。

（1） 標題は扉による。表紙の標題は「留盃瑯土」、中扉の標題は「留盃邪土（ルバイヤット）」。奥付には以下のようにある。「（波斯古詩）留盃邪土　奥付／初刷二百部限定　非商品／昭和十一年二月十五日印刷／昭和十一年二月二十日發行／著作兼發行者　京幾道高陽郡延禧面細橋里　堀井金太郎／印刷者　京城府南米倉町百五十九番地　藤本外次／印刷所　京城府南米倉町百五十九番地　行政學會印刷所」。本書は関西大学図書館特別文庫所蔵本（谷澤永一氏旧蔵書）を利用した。戦後の再刊本として、堀井梁歩訳／相場信太郎（のぶたろう）編『ルバイヤット――留盃邪土』（叢園叢書第4集、秋田・叢園社、一九七二年九月）がある。こちらは漢字の旧字体や異体字を新字体・印刷標準字体に改め、新たにルビを付し、「注」を追加するなどの変更が見られる。

（2） 梁歩の履歴については、再刊本『ルバイヤット――留盃邪土』に付された相場信太郎（一九一二―八八年）による「堀井梁歩小伝」、柳澤七郎編著『堀井梁歩の面影』（いづみ苑、一九六五年十二月）、注（37）で後出の堀井梁歩訳／相場信太郎編『異本ルバイヤット――留盃邪土』再刊本の「堀井梁歩年譜」などによった。

（3） 一九二五年七月の創刊號表紙には「堀井梁歩パンフレット」とあり、一九二六年四月の第九號まで、秋田縣河邊郡仁井田村の大道社よりほぼ毎月発行、“The Open Road”という英文標題が併記された。東京転居後の一九三〇年一月刊行の第十號からは、上高井戸の江渡狄嶺（後出）の建設社より不定期刊として、一九三一年三月の第十三號まで刊行。「大道の歌」は創刊號から第八號（第二卷第二號、一九二六年三月）まで八回に亘り連載された。同誌は緑蔭書房より一九九一年六月に全冊復刻版が出されている。

（4） 『社會及國家』第百五十七號（一九二九年四月）から第百七十四號（一九三〇年九月）まで「野人ソロー傳」（号によっては「野人素郎傳」「野人ソロウ傳」）として、第百六十二號（一九二九年九月）と第百六十八號（一九三〇年三月）とを除く全十五回連載。その後、第百八十一號（一九三一年四月）から第百八十九號（十二月）まで「野人ソロー傳（續）」として全九回連載。

（5） 「おやぢのこと」、ホイットマン著／堀井梁歩譯『草の葉』五―六頁。初出は『大道』第十號、九―一〇頁。「おやぢ」とはホイットマンを指す。

（6） 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』研究社出版、一九七〇年三月、五九九―六〇〇頁。「創訳」とは、堀井が『隣人之友』第八十號（一九三三年八月）から第九十二號（一九三四年八月）にかけて発表した「ホイットマンの詩」の翻訳を自ら呼んだ言葉。彼のホイットマン訳やソロー訳については、他にも以下の論考が参考になる。

・亀井俊介「昭和の小ホイットマンたち」、富士川英郎教授還暦記念論文集『東洋の詩　西洋の詩』朝日出版社、一九六九年十一月、二七七―八五頁。

・亀井俊介「堀井梁歩とホイットマン」『うずしお』第十五号、東京大学教養学科アメリカ科、一九七七年三月、七―一三頁

（本エッセイの閲覧に当たって、地域文化研究専攻の遠藤泰

生教授とアメリカ科教務補佐の矢島宏紀氏のご好意を忝くしたことを感謝と共に記しておきたい）。

・瀧田佳子『アメリカン・ライフへのまなざし――自然・女性・大衆文化』東京大学出版会、二〇〇〇年三月、「第三章　シンプル・ライフのゆくえ」（初出は滝田佳子「日本におけるソロー主義」『比較文學研究』第二十三號、一九七三年三月、七九―一一五頁）。

（7）「因縁」一頁。書名や訳者名への言及はないが、袖珍本という点からすると、おそらく竹友藻風譯『ルバイヤット』（アルス泰西名詩選、アルス、一九二一年三月）であろう。なお、この「因縁」はのちに梁歩吟客「ルバイヤット拾遺」と題して、ほぼそのままの形で『日本醸造協會雜誌』第三十二卷五號（一九三七年五月、九七―九九頁）に再録されている。

（8）*Works of Edward FitzGerald, Translator of Omar Khayyám, Reprinted from the Original Impressions with Some Corrections Derived from His Own Annotated Copies*, 2 vols., New-York (sic) and Boston: Houghton, Mifflin & Co. / London: Bernard Quaritch, 1887.

（9）「因縁」四―六頁。「ルバイヤット拾遺」九八頁。「呆きれ」→「呆れ」、「問題に、より多く」→「問題により多く」と異同あり。「大正日本（続）」三二頁注（44）に一部引用。「鴟」は「梟」を指すが、散文と韻文の合成物という意味では「鵐」ないし「鵺」、すなわち「ぬえ」の誤植かもしれない。

（10）「因縁」九―一〇頁。「ルバイヤット拾遺」九九頁。「なりません」→「ありません」、「じやない」→「ぢやない」、「その後」→「其後」と異同あり。「飜譯は決して字句ではありません。根本の思想そのものです」（一〇頁）の部分は「ルバイヤット拾遺」には再録されず。

（11）「因縁」一一頁。

（12）Edward FitzGerald, *Rubáiyát of Omar Khayyám: A Critical Edition*, Edited by Christopher Decker, Charlotteville and London: University Press of Virginia, 1997, p. 130. 本書は以下 Decker と略記。

（13）Decker, p. 126.

（14）以下に例を挙げる。

・四行の文字数を（ほぼ）揃えた歌――二、四、五、（十四）、十七、十九、二十一、二十三、二十八、三十九、四十六、六十三、六十六、七十九、八十、八十一、八十二、八十九、九十五。

・四行の文字数を一定字数ずつ減らした歌――四十九、六十七、七十八。

・四行の文字数を一定字数ずつ増やした歌――十六、二十二、二十七、五十、五十六、六十、九十二。

・前半二行、後半二行の文字数を揃えた歌――十五、二十四、二十五、二十六、三十三、五十四、七十、七十一、七十四、九十六。

・左右対称に配置した歌――五十八、六十九、八十四。

（15）竹友藻風譯『ルバイヤット』一四頁。「大正日本（続）」三頁。

（16）「スルタン」Sultán（第一・十一・十七・六十四歌）、「イラム」Irám / Iram,「ジヤムシツト」Jamshýd / Jamshyd（第五歌）、「ダビテ」David（第六歌）、「カイヤム」Khayyám（第十歌）、「マームツト」Máhmúd / Mahmúd（第十一歌）、「ラマザン」Ramazán（第八十一歌）。

（17）以下では対応する原詩の固有名詞や術語が反映されていない。第四歌＝初版・第四版第4歌 Moses, Jesus. 第四十二歌＝初版第48歌 Khayyám. 第四十八歌＝第四版第51歌 from Máh to Máhi. 第六十四歌＝第四版第45歌 Ferrásh.

（18）第六歌「尙古調」Péhlevi / Pehlevi, 第九歌「國王大臣」Jamshýd and Kaikobád, 第十歌「王者」Kaikobád and Kaikhosrú,「英雄」Rustum,「大臣（おとど）」Hátim Tai, 第十八歌「大王」Jamshýd / Jamshyd,「名譽獵師」Bahrám, 第二十二歌「帝王」Cæar, 第二十五歌「梟」Muezzín, 第四十二歌「天人」Angel, 第四十三歌「侍女（そばめ）」Sáki, 第四十七歌「A字（エース）」Alif, 第五十七歌「常勝將軍（じやうしやうじん）」Mahmúd, 第七十五

歌「僧」Súfi / Dervish, 第九十六歌「天の使」Angel, 第百歌「侍女」Sáki.

(19) 以下に同種の副詞の例を挙げ、原詩に対応する語があれば付記する。第一歌「飄乎と」、第五十五歌「颯と」agape, 第八十八歌「ギツギツと」a-creaking, 第九十二歌「ぼろぼろに」apieces, 第九十九歌「しづしづと」。

なお、梁歩と同郷のドイツ文学者・菊池榮一（一九〇三—八六年）によると、「とくとく」は秋田弁の「どくどく」から来ている可能性があり、第七十八歌の萬葉語「はたる」（＝搾取する）も同様だという。

・菊池栄一「梁歩「ルバイヤット」を読んで」『叢園』第四十一巻八十七号、一九七四年四月、八—一〇頁（秋田県立図書館所蔵雑誌）。

(20) 竹友藻風譯『ルバイヤット』一〇頁。「大正日本（続）」三頁。

(21) 竹友藻風譯『ルバイヤット』六五頁。「大正日本（続）」五頁。

(22) Decker, p. 181.

(23) 再刊本では「呪詛」（異体字「咒」を印刷標準字体「呪」に置き換え）の直後の疑問符のあとに一文字分の空白を入れたため、この左右対称が崩れている。

(24) 竹友藻風譯『ルバイヤット』八九頁。

(25) Decker, p. 205. 掲出の本文は第二版。初版では “pitfall”→“Pitfall,” “gin”→“Gin,” “Predestin'd Evil”→“Predestination,” と異同があり、第四版では “?”→“!” とする。

(26) 竹友藻風譯『ルバイヤット』二七頁。

(27) Decker, p. 143. 掲出の本文は第二版。[ ] 内は原文自体の脱落。初版では “living”→“tender,” 第四版では “delightful”→“reviving,” “River's Lip”→“River-Lip,” とする。

(28) 梁歩訳では第二歌にも「生命の酒の底をな見せそ」とある。

(29) 梁歩訳では第二十二歌「痕ならなくに」、第四十一歌「汝ならなくに」でも同一表現を用いている。「なくに」は元来は上代語で、中古以降は主に歌語として現われる。『萬葉集』巻第五・壱岐守板氏安麻呂「春なれば　うべも咲きたる　梅の花　君を思ふと　夜眠も寝なくに」（小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集』②、新編日本古典文学全集7、小学館、一九九五年四月、四五頁）。

(30) 冒頭の三十歌について、藻風訳と同一ないしほぼ重なる表現を「梁歩訳—藻風訳」の形で、梁歩訳の歌番号および訳語、それに対応する原詩の初版（I）または第四版（IV）の歌番号、藻風訳の歌番号および訳語、両者の原詩の順に挙げておく。なお、原詩は便宜的に第二版の形を掲げ、初版の異同は［ ］内に、第四版の異同は（ ）内に示す。最後の第二十八歌のように、ほとんど一首全体を借用して剽窃に近くなっている場合があることにも注意すべきである。

・第三歌「鶏鳴けば」（I:3, IV:3）—第三歌「鶏鳴けば」as the Cock crew.

・第四歌「大地より息づく」（I:4, IV:4）—第四歌「大地よりイエスも息づく。」Jesus from the Ground suspires.

・第十五歌「雨の如空にふり撒く者」（I:15, IV:15）—第十六歌「雨のごと風にふり撒く者」And those who flung it to the winds [Winds] like Rain.

・第十六歌「諸人の心をかくる世の願望、」（I:14, IV:16）—第十七歌「もろ人の心をかくる世の望は」The Worldly Hope men set their Hearts upon.

・第十九歌「愛人よ、充たせ盃、此一つきぞ」（I:20, IV:21）—第二十一歌「戀人よ、滿たせ、さかづき、この日より」Ah, my Beloved, fill the Cup that clears / To-day.

・第二十二歌「花園を飾るヒヤシンスこそ、／亡き麗人の頭より落ちにしか。」（I:18, IV:19）—第二十四歌「花園の風信子こそ今は亡き／麗人のかうべより膝に落ちしか。」That every Hyacinth the Garden wears / Dropt in her [its] Lap from some once

lovely Head.

・第二十五歌「今日の爲に備をなせし輩、／明日の爲に目を見張る輩、」(I:24, IV:25)—第二十七歌「今日」のため、そなへをなせるともがらに、／「明日」に眼をみはりゐる者のためにも、」Alike for those who for To-day prepare, / And those that after some [a] To-morrow stare.

・第二十七歌「吾も亦若き時切に通ひき、」(I:27, IV:27)—第三十歌「われもまた、若き時、せちに通ひて、」Myself when young did eagerly frequent; 同「出で來しは入りにし同じ門なりき。」—「いで來しは、入りにしおなじ門なりき。」Came out by the same door [Door] as (where) in I went.

・第二十八歌「智慧の種を彼等と共に蒔きぬ、／我手もてつちかひ水そゝぎぬ、／收穫に我が刈り得しは、曰く、／「水の如我來り、風の如我往く。」(I:28, IV:28)—第三十一歌「智慧の實をかれらとともにわれ蒔きぬ。／わが手もてこれを培ひ、およすげぬ。／かりいれにわが刈り穫しはこれなりき、——／『水のごとわれ來り、風のごと逝く。』」With them the seed [Seed] of Wisdom did I sow, / And with my (mine) own hand wrought to make it [labour'd it to] grow:(;) And this was all the Harvest that I reap'd—/ "I came like Water, and like Wind I go."

(31) すでに触れた第十二歌の「南風」のほか、以下のような例が見られる。丸括弧内は原詩の初版（I）または第四版（IV）の歌番号を示す。

・第十三歌「鋒火は擧り、旗皷は轟く」Oh, the brave Music of a *distant* Drum ! (I:12)/ Nor heed the rumble of a distant Drum! (IV:13)—「鋒火」(「烽火」の誤植) は原文にはない付加。

・第三十八歌「汝は傾けよ、飲みし盃、／殘月の懸るがごとく。」Do you devoutly do the like, till Heav'n / To Earth invert you — like an empty Cup (IV:40)—原文には「そなたも謹んで同様のこと（飲酒）をなせ、天がそなたを空の盃のごとく地に伏せるまで」とのみあって、「殘月」という観念は梁歩の付加。

・第九十五歌「沙漠の中の蜃氣樓、／一閃の泉のすがた、」Would but the Desert of the Fountain yield / One glimpse — if dimly, yet indeed, reveal'd (IV:97)—原文には「たとえぼんやりとでもよいから、それでも確実に、沙漠が泉を一目垣間見せてくれたらよいのに」とあって、「蜃氣樓」は梁歩の付加。「樓」のルビ「らう」は「ろう」とあるべきところ。

(32) 以下はその例である。丸括弧内は原詩初版（I）ないし第四版（IV）の歌番号。両者に異同がある場合は初版本文を掲げ、［ ］内に第四版の形を示す。

・第十五歌「等しく大地を黄金に化し得ず、／埋し寶は他人堀返さでおかじ。」Alike to no such aureate Earth are turn'd / As, buried once, Men want dug up again (I:15, IV:15)—原文は「一旦埋められたのち、再び掘り返されることを人々が望むような黄金の土には誰一人変化しない」が原義なので、「他人掘返さでおかじ」では意味が逆。「堀」は「掘」の誤植であろう。

・第二十四歌「そしておはり。」sans End! (I:23, IV:24)—原文は「終わることなく」「永遠に」。

・第三十歌「問ふ間なく「何處より」早前にあり、／問ふ間なく「何處へ」は早後にあり、」What, without asking, hither hurried *whence?* / And, without asking, *whither* hurried hence! (I:30)—冒頭の "What" を間投詞、"hurried" を他動詞 "hurry"（〜を急がせる、急派する）の過去分詞と解する場合、「何と言うことだ、頼んでもいないのに（我々は）どこからこの（現世）に急いで連れてこられ／頼んでもいないのにここからどこへ急いで連れてゆかれるのか」といった意味になろう。これに対し梁歩訳は、"*whence*" "*whither*" という単語自体を自動詞 "hurry"（急ぐ）の主語と取っているように見える。

・第四十八歌「痛苦鬱憂をなぐめ得む、」elludes your pains (IV:51)—原文は「努力を回避する」すなわちいくら努力しても捉え

ることができないという意味。複数形“pains”は「苦痛」ではなく「骨折り」と取るべきであろう。対応する藻風訳第五十二歌の「痛苦をのがれ」に引かれたか。「憂」のルビ「ゆう」は「いう」とあるべきところ。

・第九十歌「埋れし我が灰さへ、／係蹄の如空に投げられ、」ev'in my buried Ashes such a Snare［snare］/ Of Perfume［Vintage］shall fling up into the Air（I:68, IV:92）—原文では「灰が葡萄の蔓の罠を空中に投げ上げる」とあるので、灰が空中に投げられるとするのは原義と異なる。

（33）いくつか例を挙げる。丸括弧内は原詩初版（I）ないし第四版（IV）の歌番号。

・第二十五歌「梟」A Muezzín（I:24, IV:25）—原義は、アラビア語で「ムアッズィン」Mu'azzin と呼ばれる礼拝呼びかけ人。

・第三十五歌「ほのかなる含羞もて」with fugitive / Articulation（I:35）—原文は「かすかな声で」「捉えがたい発音で」が直訳。原語は第三十六歌の「かそけきさゝやき」with its all obliterated Tongue（I:36）と同じ意味で用いられているとすると、後者に対応するペルシア語原文（ボドレー図書館所蔵ウーズレー写本第八十九番＝ニコラ版第二百十一番、ホワインフィールド版第二百五十二番）は「神秘の言葉で」be zabān-e ḥāl となっている。「神秘の言葉」とは元来はイスラム神秘主義に由来する観念で、一定の神秘階梯に達した神秘主義者に聞き取ることができるという、言葉を持たない事物や動植物が発する言葉のこと。

・第四十一歌「もの皆は始あり終あり、」End in what All begins and ends in（IV:42）—原文は「（酒も唇も）万物の始原であり終焉であるもの（＝無）に帰する」という意味。藻風訳第四十五歌「一切の終始のものに果つ」という句を換骨奪胎したのであろうが、原文の意味からは乖離している。

・第四十六歌「そが上にまつはる紛紜。」upon what, prithee, does life depend?（IV:49）—原文は「人生は何物に依拠しているのか」なので、かなり大胆な意訳である。

・第七十三歌「開闢の朝に書きしは、／審判の夜のこと。」the first Morning of Creation wrote / What the Last Dawn of Reckoning shall read（I:53, IV:73）—「創造の日の最初の朝に（神が）書き記したのは、審判の日の最後の夜明けに（神が）読むはずの事柄だ」というのが原義。“Dawn”を「夜明け」ではなく「夜」としたのが意図的かどうかは判らないが、「審判の夜のこと」はかなりの省略表現である。

右に言及したウーズレー写本は後注（52）参照。ニコラ版およびホワインフィールド版の書誌情報は以下の通り。

・*Les Quatrains de Khèyam*, traduits du Persan par J. B. Nicolas, Paris: L'Imprimerie Impériale, 1867.

・*The Quatrains of Omar Khayyám*, The Persian Text with an English Verse Translation by E. H. Whinfield, Second Edition, Corrected and Enlarged, London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Limited, 1901.

（34）安倍能成「堀井梁歩の死」、同『自然・人間・書物』岩波書店、一九四二年六月、一三一頁。初出は「堀井梁歩の死【1】」として『京城日報』一九三八年十月十一日、第四面（「「ルバイヤッドの會」」→「『ハバイヤッドの會』」）。のち、「堀井梁歩君」と改題して、次項で取り上げる堀井梁歩譯『波斯古詩』異本留盃邪土』の戦後の復刊本、『ルバイヤット——異本留盃耶土』（南北書園、一九四七年五月）、一三七—三八頁に再掲（「嗅ぎつつ」→「嗅ぎつゝ」、「ルバイヤッドの會」」→「『ルバイヤットの會』」）。なお、復刊本は中扉に「ルバイヤット／異本留盃邪土」、奥付に「ルバイヤット」とあるが、本稿では再刊本との区別がつきやすいよう本扉の「異本留盃耶土」の表記を用いることとする。

（35）堀井金太郎「日本に於ける「ルバイヤット」の書誌」『讀書』第一巻第三號、朝鮮讀書聯盟、一九三七年五月、一二—一三頁。のち、堀

井梁歩「日本に於ける『ルバイヤット』の書誌」として、復刊本『ルバイヤット――異本留盃耶土』一〇九―一〇頁に再録。後者では「いはれ」→「言はれ」と表記。

(36) 慶政のいわゆる「南番文字」をめぐる梁歩とポッターとのやりとりについては、「大正日本（続）」三八―三九頁注（97）参照。

(37) 相場信太郎「後記」、再刊本『ルバイヤット――留盃邪土』一四六頁。「フィッツジェラルド訳以外のカウル、エマーソン訳やボドレー稿本からの集録」とあるが、後述するようにこれは不正確である。なお、堀井梁歩訳／相場信太郎編『異本ルバイヤット――留盃邪土』再刊本（叢園叢書第5集、叢園社、一九七八年八月）の「後記」一四三頁には、「著者はサンフランシスコに住む人らしく、同地のラボエーム・クラブから出版されたことになっている」とも付け加えられている。

(38) リスターに関する詳細は不明だが、最新版『ルバイヤート』書誌によると、典拠が不明だったり（orphan quatrains）、大幅に意訳（paraphrased）されたりしたルバーイーばかりを集め、書籍として刊行していたようである。ポッター書誌を補う意図で編纂された最新版書誌は以下の通り。

・Jos Coumans, *The Rubáiyát of Omar Khayyám: An Updated Bibliography*, [Leiden:] Leiden University Press, 2010, nos. 397–402.

そのなかから、リスターの著作を二点ほど挙げておく（ただし引用者未見）。

・*Rubaiyat of Omar Khayyam: Orphan Quatrains*, by Henry Bertram Lister. San Francisco: La Boheme Club, 1935 (44p., 288 quatrains).

・*The Rubaiyat of Omar Khayyam: A Century of Paraphrased Quatrains*, by Henry Bertram Lister. San Francisco: La Boheme Club, 1945.

(39) タイプ原稿を謄写版印刷した五十二冊限定、著者署名入り十三頁の小冊子。一頁に十編ずつ、合計百十編のルバーイー英訳が収められている。二頁目の「序文」によると、ウマル・ハイヤームは約千二百のルバーイーを残したとされるが、各国語に訳される過程で大幅な変容を蒙ったので、著者は四十年近くそうした訳ばかりを集めてきた。そのうち二百八十六（ママ）点を「親のない四行詩」Orphan Quatrains と名づけて刊行したところだという。そして本書は、「世界最大のウマル研究家」the greatest Omarian Scholar in the World ポッターの助言に基づいて編纂されたと付け加えられている

筆者はニューヨーク大学図書館（Elmer Holmes Bobst Library）所蔵の「No. 14」を閲覧した。

(40) 再刊本『ルバイヤット――留盃邪土』一四六―四七頁。再刊本『ルバイヤット――異本留盃邪土』一四四頁に再録（読点、送り仮名、仮名遣い、踊り字の有無などに異同あり）。梁歩の文章の引用だが、典拠は示されていない。

(41) 再刊本『ルバイヤット――異本留盃邪土』一四六頁。

(42) 奥付の記載は「波斯古詩異本留盃邪土（ママ）　奥付／初刷百部限定　非商品／昭和十三年一月二十七日印刷／昭和十三年一月三十一日發行／著作兼發行者　京城府東横町四六番地　堀井金太郎／印刷者　會（ママ）城府南米倉町一五九番地　大谷　保／印刷所　京城府南米倉町一五九番地　行政學會印刷所」。表紙には墨書きの草書体で「異本留盃邪土」、裏表紙には「平歩散人藏版」とのみ記されている。便宜上、奥付の「土」は「土」に改めて引用する。本書は東京大学駒場図書館・一高文庫所蔵本を閲覧した。

戦後の復刊本は注（34）、再刊本は注（37）に書誌情報を掲出。初刊本に収録された百一首には歌番号も頁番号（丁づけ）もないが、便宜上冒頭から順に一から百一まで通し番号を付すことにする。復刊本・再刊本はいずれもこの形で番号を補っている。なお、再刊本の本文は原則として新字体を使用しているが、以下で初刊本・復刊本との異同を示すさい、（その原則から外れる場合を除いて）逐一はその旨を断わらないこととする。

(43) 以下はその例である。リスター版の原文はすべて大文字表記

だが、引用にさいし、各行冒頭の単語や固有名詞の語頭文字を除いて小文字に統一した。以下同様。

・リスター版第八十一歌第三行 “For I have smashed my goblet on the floor,”（＝梁歩訳第七十四歌第三行「我は大盃を床に投げつけたり」）。ニコラ版第四百四歌第一行、ホワインフィールド版第四百四十六歌第一行、ウーズレー写本第百四十六番第一行 “bar sang zadam dūsh sabū-yē kāshī”（昨晩私は陶器の壺を石の上に投げつけた）。

・リスター版第八十九歌第二行 “It has foreboding like a distant drum,”（＝梁歩訳第八十二歌第二行「遠くから響く太鼓のやうに」）。ホワインフィールド版第百八歌第四行 “k-āvāz-e dohol shenīdan-az dūr khosh-ast”（なぜなら、太鼓の響きは遠くから聞くのが心地よいから）。ウーズレー写本第三十四番第四行もほぼ同一。

（44） 復刊本・再刊本では「方舟」→「方舟」、「怕るゝ」→「怕るる」、さらに復刊本では「崇り」→「祟り」、再刊本では「崇り」→「祟り」とする。

（45） 復刊本・再刊本では「殘ン」→「殘ン」、「終」→「終り」と異同がある。

（46） 復刊本・再刊本では「神機妙算」「爐邊山中」の直後の読点を削除して一文字分の空白とし、「隱るゝ」を「隱るる」と表記する。再刊本でも「邊」の文字のみは旧字体を使用。

（47） 例えば南朝宋・范曄撰『後漢書』巻七十一、列傳第六十一「皇甫嵩」に「匕びし漢を已に墜ちたるに推せば、實に神機の至會、風發の良時なり」、唐・姚思廉撰『陳書』巻十九、列傳第十三「虞寄」に「此將軍妙筭の遠因、衷誠に發する者なり」とある。『日本国語大辞典』第二版、第七巻（小学館、二〇〇一年四月）、五六二頁は「神機妙算」の用例として、古典では一七四九年刊の近路行者（都賀庭鐘）作『古今奇談英草紙』巻之三「五　紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話」（日本名著全集、江戸文藝之部、第十巻〔怪談名作集〕、一九二七年十月、四九二―九三頁）、近代では内田魯庵『社會百面相』「虚業家尺牘數則」八（博文館、一九〇二年六月、二一八頁）などを挙げる。

（48） この種の「創訳」の例をいくつか挙げておく。再刊本・復刊本における表記の異同は省略する。

・第八歌四行目「至上の權者はいかなる人情にも耳をかさず」―原文（第十六歌）に対応する文言欠。

・第十一歌一行目「長き徒然に堪へかねて」―原文（第八歌）に対応する文言欠。

・第十一歌四行目「大戰爭」―原文（第八歌）は “earthquake, flood or fire”（地震、洪水、火事）。

・第十八歌三・四行目「叡智と愚痴と／所詮同じきかな信と不信と」―原文（第十一歌）に対応する文言欠。

・第二十三歌三・四行目「一度ラブの放射に遇ひては／銃火劍戟防ぐなし」―原文（第二十七歌）“When smitten by the errant shafts of love: / Love travels on a path that’s strange and lone.”（愛の気紛れな矢に射抜かれたとき。／愛は奇妙で孤独な道を旅する）を大幅に改変。

・第四十五歌二行目「あるかなしの小徑、みゝずののたくり」―原文（第四十九歌）は “dim paths”（幽かな小径）とのみあって、「みゝずののたくり」は訳者の追加。

・第七十八歌四行目「朝貌の開くやうに私の目も開いた」―原文（第八十五歌）は “He sang a happy song to God, I know.”（彼が神に向かって幸福な歌を歌ったことを私は知っている）。

・第八十一歌一行目「夢は五臟の疲といふ」―原文（第八十八歌）に対応する文言欠。

・第八十二歌四行目「屁ひつたこと迄一々罪に勘定されたら助からんわい」―原文（第八十九歌）は “ye can always tremble if each sin / is in your mind’s eyes added to crime’s sum.”（個々の過ちが心眼において犯罪の総計に加えられるとすれば、人はつ

ねに恐れおののいていることになりかねない）。

・第八十四歌四行目「自轉、公轉、反轉も勝手ですわい」—原文（第九十二歌）に対応する文言欠。

・第八十五歌四行目「内に焚くストウブの焔」—原文（第九十三歌）は“I find / From wine that I receive reviving heat”（蘇生の熱を私は酒から受け取ることに気づく）。

・第八十六歌三行目「永遠につゞく極樂淨土へ」—原文（第九十四歌）は“to attain your goal”（目的地に到達するために）。

・第九十五歌三行目「蛇だの蝎だの鷲だの鴉だの」—原文（第百四歌）に対応する文言欠。

・第九十八歌四行目「ちゞこめる田螺の如き心」—原文（第百七歌）は“a contrite heart”（悔恨の心）。

（49）いくつか例を挙げる。再刊本・復刊本における表記の異同は省略する。

・第三歌一行目「主」、四行目「聖廷」—原文（第三歌）は“Jesus”（イエス）と“the prophet’s bar”（預言者の法廷）。

・第十四歌四行目「汝か叡智、吹く風に和ませよ」—原文（第十四歌）は“Thy barque with wisdom trim well to the breeze”（叡智によって汝の船の帆を風に和ませよ）。

・第十六歌三・四行目「踏み行くも何は餌食道傍に／爪とぎねらふ荒鷲の」—原文（第十五歌）は“The man who travels it on carrion feeds”（その道を行く旅人は腐肉を喰らう）。

・第十八歌二行目「夜の妄想は選ぶなし」—原文（第十一歌）は“those vagaries of filmy night / A true believer pearls of wisdom deems”（ぼんやりした夜の妄想を／真の信徒は叡智の真珠と見做す）。

・第五十三歌一行目「神よりの外、至上の權は人に落ちず」—原文（第六十歌）は“Supreme authority no man concedes / To any other man but prudence heeds.”（至上の権限を他者に譲ろうと／すると必ず分別が注意を促す）。

・第六十九歌一行目「聖徒」—原文（第七十六歌）は“the prophet”（預言者）。

・第七十歌四行目「殿堂」—原文（第七十七歌）は“the mosque”（モスク）。

・第七十一歌三行目「定の日來りなば」—原文（第七十八歌）は“on the holy days”（祝祭日に）。「定の日」とすると、最後の審判の日と誤解される恐れがある。

・第七十八歌二行目「夜明鴉」—原文（第八十五歌）は“A bulbul”（夜鳴鶯）。

・第八十六歌二行目「大空を駈廻る怪獸」—原文（第九十四歌）は“Cynosura”（小熊座）と“Helice”（大熊座）。

・第八十九歌四行目「ミュエッェン」—原文（第九十九歌）は“muezzin”（「ムアッズィン」すなわち礼拝呼びかけ人）。

・第九十歌四行目「ムスタッファ」—原文（第百歌）は“Mustafa”（預言者ムハンマド）。

・第九十二歌四行目「鴉が酒盃のやうな眼を光らしてる」—原文（第百一歌）は“Only a crow the goblet bright doth eye”（鴉だけが輝く酒杯をじっと見る）。「鴉」とは星座の「鴉座」Corvus,「酒杯」は「コップ座」Crater を意味している。

・第九十三歌「水瓶を持つてる奴」—原文（第百二歌）は“Aquarius”（水瓶座）。

（50）再刊本でも「缺」「盡」は旧字体を使用。

（51）“Omar Khayyám, the Astronomer-Poet of Persia,” *Calcutta Review*, Vol. 30, No. 59, March 1858, p. 157.

（52）*The Ruba’iyat of Omar Khayyám*, Being a Facsimile of the Manuscript in the Bodleian Library at Oxford, with a Transcript into Modern Persian Characters, Translated, with an Introduction and Notes, and a Bibliography, by Edward Heron-Allen, London: H. S. Nichols LTD., 1898, pp. 236–37. 以下、本書は Heron-Allen 1898 と略記。

（53）最澄の『山家學生式』（八一八年）に見える言葉（原漢文）。『傳

教大師全集』第一、天台宗宗典刊行會、一九一二年七月、五頁「天台法華宗年分學生式一首」一頁。ただし現在では「照于一隅」ではなく「照千一隅」と読んで「照千里・守一隅」の省略と解釈するのが定説となりつつあるようである。以下を参照。

・安藤俊雄・薗田香融校注『最澄』日本思想大系4、岩波書店、一九七四年五月、一九四頁、四二七頁（補注）。

・岡本健一『発掘の迷路を行く（上巻）――古典考古学以後』毎日新聞社、一九九一年六月、二〇〇―〇六頁「「一隅を照らす」――最澄の名言論争」。

・同『古代の光――歴史万華鏡』三五館、一九九六年十月、二三三―三九頁「一隅を照らす――千里を照らすが最澄の理想」「一隅論争二〇年――高尚な論争の陰の人間関係」（初出は『毎日新聞』東京版、一九九四年七月十五日および二十二日、夕刊第十面）。

(54) 復刊本・再刊本では「ずぼらな性分から、」の読点を省略して一文字空きとする。また、再刊本は「俺（おら）ア」とルビを付している。

(55) これはフィッツジェラルド訳第二版以降の「序文」に記された彼自身の英訳である。Decker, pp. 32, 63, 94. 梁歩が用いた『フィッツジェラルド著作集』第一巻では、「ルバイヤート」本文は初版と第四版とが見開きで対照されているが、「序文」のみは第四版（と、第三版のみに追加されたニコラ版に関する注記）が掲げられており、掲出の四行詩も p. 9 に見られる。

(56) Heron-Allen 1898, pp. 118–19.

(57) エマソンによるドイツ語訳からのペルシア詩の重訳とその影響については、以下の論考が概要をまとめている。

・J. D. Yohannan, “Emerson’s Translations of Persian Poetry from German Sources,” *American Literature*, Vol. 14, No. 4, January 1943, pp. 407–20.

・J. D. Yohannan, “The Influence of Persian Poetry upon Emerson’s Work,” *American Literature*, Vol. 15, No. 1, March 1943, pp. 25–41.

(58) 復刊本・再刊本では「許されし日、」の読点を省略して一文字空きとする。また、再刊本は「逡」→「浚」と表記。

(59) ティームール朝時代の歴史家ダウラトシャー Dawlatshāh al-Samarqandī による詩人伝『詩人たちの回想』*Tadhkira al-Shu‘arā’*（一四八七年以降成立）に引用がある。ペルシア語原文は以下の通り。

・’Amīr Dawlatshāh al-Samarqandī, *Tadhkira al-Shu‘arā’*, Ed. with Prefaces and Indices by Edward G. Browne, London: Luzac & Co. / Leiden: E. J. Brill, 1901, p. 43.

az marg ḥadhar kardan dō rūz ravā nīst
rūzī ke qadā bāshad-o rūzī ke qadā nīst
rūzī ke qadā bāshad kūshesh na-konad sūd
rūzī ke qadā nīst darū marg ravā nīst

天命の日と天命にあらざる日
二つの日に死を避けることは許されない
天命の日は（避ける）努力が無駄になり
天命にあらざる日に死は許されない

これは各行末尾が、通常のルバーイーの韻律より一音節ずつ増加した、顫調（hazaj-e akhrab-e makfūf-e maḥdhūf とその変型）から成る。ペルシア語原典校訂者のブラウン Edward G. Browne（一八六二―一九二六年）による英訳は、彼の『ペルシア文学史』に見られる。

・Edward G. Browne, *A Literary History of Persia*, Vol. II, Cambridge: Cambridge University Press, 1928, p. 158.

エマソンの一八四九年の日記には、彼がハンマー訳（ダウラトシャーの詩人伝を基礎とした文学者列伝）に依拠したことが詩の英訳とともに書き留められている。

・*The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emer-*

son, Volume XI: 1848–1851, Edited by A. W. Plumstead, William H. Gilman and Ruth H. Bennett, Cambridge, Mass. / London: The Belknap Press of Harvard University Press, 1975, p. 103.

・Joseph von Hammer, *Geschichte der schönen Redekünste Persiens, mit einer Blüthenlese aus zweyhundert persischen Dichtern*, Wien: Bey Heubner und Wolke, 1818, p. 43, VI. Pindar aus Rei in Kuhistan:

Umsonst fliehst an zwey Tagen du den Tod,
Wo ihn bestimmt, und nicht bestimmet Gott.
Am ersten rettet dir kein Arzt das Leben,
Am zweyten kannst du nicht den Geist aufgeben.
神が定める日と定めない日、
二つの日にそなたが死を避けるのは無駄である。
第一の日にはいかなる医者もそなたの生命を救いえず、
第二の日にそなたは魂を放棄しえない。

（60）　エマソンの詩集『晦月祭その他』（一八六七年）に初出。その後、〈リヴァーサイド版全集〉の改訂新版では詩人名を“Omar Khay yam”と修正し、〈生誕百年記念版全集〉では“Ali Ben Abu Taleb”すなわちアリー‘Alī ’ibn ’Abī Ṭālib（第四代カリフ。在位六五六―六六一年）の作品の直後に、やはり詩人名なしで引用されている。

・Ralph Waldo Emerson, *May-Day and Other Pieces*, Boston: Ticknor and Fields, 1867, “Translations,” From Omar Chiam, p. 201.

On two days it steads not to run from thy grave,
The appointed, and the unappointed day;
On the first, neither balm nor physician can save,
Nor thee, on the second, the Universe slay.

・Idem, *Poems*, New and Revised Edition, Emerson’s Complete Works, Vol. IX, Cambridge, Mass.: Printed at the Riverside Press, 1883, From Omar Khay yam, p. 248.

・Idem, *Poems*, The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, Vol. IX, Centenary Edition, 1904, “Translations,” From Ali Ben Abu Taleb, p. 302.

彼の著作『人生論』（一八六〇年）でも、詩人の名前への言及なしに引用がなされている。初刊本および全集版の書誌情報と大正期の邦訳を挙げておく。

・Ralph Waldo Emerson, *The Conduct of Life*, Boston: Ticknor and Fields, 1860, I. Fate, p. 3.

・*The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol. VI（The Conduct of Life）, Cambridge, Mass. / London: The Belknap Press of Harverd University Press, 2003, I. Fate, p. 3.

・戸川秋骨譯『人生論』、エマアソン全集第八卷、國民文庫刊行會、一九一七年三月、「宿命」六頁。

汝の墓場より逃れんとするも効なき日一あり、
命數の定まれる日と命數の定められぬ日となり、
第一の日には醫藥もこれを救ふの道なく、
第二の日には宇宙も汝を殺す能はじ、

梁歩は第一行の「その役に立つ」という意味の古語“stead”を捉えそこねたらしく、「二つの日は我墓の上に交代せず」と、エマソンの原詩からかけ離れた訳を捻り出し、第三・第四行も「創訳」になっている。

（61）　復刊本・再刊本では「許されし事、」の読点を削除して一文字空きとする。

（62）　エマソンのエッセイの初出、『文学と社会的目的』初刊本（いずれも詩人名をOmar Chiamと表記）および〈リヴァーサイド版全集〉の改訂新版（詩人名をOmar Khayyamと訂正）、ならびに

大正期の邦訳の書誌情報を掲げておく。

・Ralph Waldo Emerson, “Persian Poetry,” *The Atlantic Monthly*, Vol. I, No. VI, April 1858, p. 726.

・Idem, “Persian Poetry,” *Letters and Social Aims*, Boston: James R. Osgood and Company, 1876, p. 219.

・Idem, “Persian Poetry,” *Letters and Social Aims*, New and Revised Edition, Emerson’s Complete Works, Vol. VIII, Cambridge, Mass.: Printed at the Riverside Press, 1883, p. 231.

・戸川秋骨譯『文學及社會』、エマアソン全集第六卷、國民文庫刊行會、一九一七年十二月、「ペルシヤの詩」三九八—九九頁（後半二行には傍点あり）。

天が下なる地の廣き公道を
自から足りて行く人は只二人のみ、
正しき事と禁斷の事とを知る人と
智識をもち得ぬ人との二人のみ

（63）この「ペルシアの詩」の冒頭にはフォン・ハンマー＝プルクシュタルの名前（ハンマーは一八三五年にプルクシュタル伯爵夫人領と男爵位を相続して二重姓に改名）とそのドイツ語訳への言及がある。

（64）Joseph von Hammer, “XX. Omar Chiam,” p. 82.

In den unendlichen Bezirk hienieden,
Sind zweyerley Personen nur zufrieden,
Der, so was gut und bös ist wohl erkennt,
Und der, dem ganz Unwissenheit beschieden.
この現世の無限の領域では、
ただ二種類の人間のみが満足する。
善悪をよく弁えた者と、
まったくの無知を授けられた者と。

（65）復刊本・再刊本では、すべての読点を削除して一文字分空け、復刊本では「先達」を「先輩」に替えている。また、再刊本では「呉」「途」にルビを付す。

（66）エマソンの詩集『皐月祭その他』や〈リヴァーサイド版全集〉改訂新版の「翻訳」の章には見られず、〈生誕百年記念版全集〉で初めて追加された作品。ハンマー訳も併せて掲げる。

・*Poems*, The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, Vol. IX, Centenary Edition, “Translations,” From Omar Khayyam, p. 301.

・Joseph von Hammer, p. 81.

Thu’ auf das Thor! denn der Eröffnende bist Du,
Zeig’ mir den Weg! denn der Wegweisende bist Du.
Ich lege meine Hand in keines Führers Hand,
Weil sie vergänglich sind, der Ewige bist Du.
扉を開いて下さい、あなたは開扉者だから、
道を示して下さい、あなたは指南役だから。
私はわが手をいかなる先達の手にも委ねない、
それらは儚いが、あなたは永遠者だから。

（67）安倍能成「堀井梁歩の死」、同『自然・人間・書物』一三二—三三頁。初出は「堀井梁歩の死【2】」として『京城日報』一九三三年十月十三日、第四面（パラルビ、鍵括弧の代わりに二重鍵括弧使用、句読点の種類や有無に異同あり。「留盃耶土」→「留盃瑯土」、「用ゐ」→「用ひ」）。復刊本『ルバイヤット——異本留盃耶土』一四〇頁。再刊本『異本ルバイヤット——留盃邪土』一五〇—五一頁、柳澤七郎編著『堀井梁歩の面影』六八頁に再録。これらはいずれも初出に依拠しているが、それぞれ細部に異同が見られる。

文中「苔紙」は「アオミドロをすきこんで作った手すきの和紙」（『日本国語大辞典』第二版、第八巻、六四八頁）で、実際、表紙に用いられた和紙には髪の毛状の藻類が漉き込まれている。

初出では「苔紙」と（おそらく編輯部による）ルビが付されているので、「こけかみ」と読ませるつもりだったのかもしれない。

(68) 次節で扱う森亮も、本書収録の「一〇一篇の大部分が堀井の創作四行詩」と断定しているが、すでに見たように、リスターの底本に収められた四行詩自体は「創作」であっても、梁歩はあくまでもそれに依拠して翻訳ないし「創訳」を行なっている。森亮「日本におけるルバイヤット」、同『夢なればこそ』文華書院、一九七六年十二月、一一七頁（初出は『英語青年』第百十九巻十一号、一九七四年二月一日、六七七頁）。オーマー・カイヤム／森亮訳『ルバイヤット』クラテール叢書3、国書刊行会、一九八六年十二月、「解説」一六一頁。

(69) 太宰治『人間失格』筑摩書房、一九四八年七月、一五四―五九頁。初出は『展望』第三十一號、一九四八年七月、五〇―五一頁。のち『太宰治全集』10、筑摩書房、一九九九年一月、四七八―八一頁。引用された梁歩訳の歌番号は、第四十九、五十五、二十六、八十二、三十一、三十六、四十四、八十三、八十四、七十二、九十の合計十一首。

太宰の引用では、以下のような異同がある。第四十九歌「まア」→「まァ」。第五十五歌「たへず」→「たえず」（初出では「たへず」）。第八十二歌「崇り」→（初出）「祟り」。第三十六歌「美はしくも」→「美しくも」、「かよはき」→「かよわき」（初出では「かよはき」）、「負はされ」→「負はされて」。第八十三歌「彷徨き」→「彷徨」、「ヘッ」→「ヘッ」、「エヘッ」→「エヘッ」。第八十四歌「ポッチリ」→「ポッチリ」、「點じやい」→「點ぢやい」（初出では「點じやい」）。第七十二歌「至る」→「到る」（初出では「至る」）。第九十歌「ムスタツフア」→「ムスタッフア」。

『全集』では梁歩訳復刊本によって校訂され、その一部が「校異」五七六頁に示されているが、第八十三歌の「彷徨」のみは太宰の表記のままになっている。

(70) 津島美知子「書斎」、同『回想の太宰治』人文書院、一九七八年五月、六三頁。

(71) 第八十一號、一九三九年二月、二一―二六頁。第八十二號、三月、四四―四九頁。第八十三號、四月、六四―六九頁。

(72) 収録にさいし、第三歌および第十歌三行目の末尾に読点、第十七歌、第十八歌および第四十歌の二行目に句点を加え、第七歌四行目「短きを」を「みじかきに」としたほかは、ルビの追加、「々」→「〻」（第二十七歌）のような踊り字の種類の変更、「ヂヤムシツド」→「ヂァムシッド」（第五・第八・第十七歌）、「ヒヤシンス」→「ヒアシンス」（第十八歌ルビ）、「たしか」→「確か」（第二十六歌）のような表記の変更が若干見られる。また、第五十三歌三行目には「はじめ」→「はじ」と脱字が生じている。

なお同書は、訳詩本文七十五頁に対し、八十三頁が「解題」と「註解」に宛てられている。戦後、以下の形で再刊された。

・フィッツジェラルド／森亮訳「ルバイヤット――オーマー・カイヤムの四行詩」、篠田一士編『世界名詩集』世界文学全集66、筑摩書房、一九六九年七月、一七二―八五頁（訳詩のみ）。

・フィッツヂェラルド／森亮訳『ルバイヤット』槐書房、一九七四年十二月。

(73) オーマー・カイヤム／森亮訳『ルバイヤット』クラテール叢書3、「解説」一四六頁。再録＝森亮訳詩集『晩国仙果』I（イスラム世界）、小沢書店、一九九〇年七月、「注解」二四〇頁。

(74) 森亮「矢野峰人博士の半面像――八雲文学碑設立記念講演で来松」『島根新聞』一九六七年九月二十三日、第三面（文化）。のち、「矢野峰人博士の半面像」と題して、同『夢なればこそ』二一九頁。

(75) 一三四―三五頁。原文には出典注・説明注が付されているが、引用においては省略した。矢野峰人の「波斯四行詩集」については「大正日本（続）」一四―一五頁、文言の引用は同一六頁参照。

(76) 書誌情報は以下の通り。その後、注（68）に前出の『ルバイ

ヤット』および(73)に前出の『晩国仙果』Ⅰに再録されている。
・「新訳ルバイヤット㈠〜㈨――オーマー・カイヤムの四行詩」『果樹園』第百四十―百四十九号、一九六七年十月―一九六八年七月。
・『世界名詩集』カラー版世界文学全集、別巻第1巻、河出書房新社、一九六九年五月、六八―七六頁。

(77) 森亮「訳詩の方法――文語訳『ルバイヤット』の場合」『梅花女子大学開学二十周年記念論文集』梅花女子大学文学部紀要(英語・英米文学編)、一九八五年三月、二〇五―二二五頁。

(78) Decker, pp. 11, 130.

(79) 森亮「訳詩の方法」二〇九頁。第十一歌についてはとくに、「四行目が七・五の軽快なリズムで終わっていることが寧ろこの享楽愉悦の歌の結びとしては適切だと言ってよかろう」と評価されている。

(80) ダッシュ以外に、原文の斜体や冒頭大文字+小頭文字(スモール・キャピタル)による強調も無視される一方、主として発話を示す二重引用符(“ ”)は二重鍵括弧(『 』)で示される(第十二・第四十一歌は除く)。冒頭大文字の抽象語の一部(第七歌「「時」」Time, 第二十一歌「「時」と「さだめ」」Time and Fate, 第三十八・四十七歌「「無」」Nothing)と、訳者の補足語(第五歌「ヂァムシッド「日の王」」)のみ、通常の鍵括弧(「 」)が用いられている。

(81) 森亮「訳詩の方法」二二三頁。

(82) 『萬葉集』巻三・二八七「ここにして　家やもいづち　白雲のたなびく山を　越えて来にけり」(小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集』①、新編日本古典文学全集6、小学館、一九九四年五月、一八七頁)。近代でも、例えば芥川龍之介(一八九二―一九二七年)に「丸善の二階」と題した短歌「しぐれふる町を幽けみここにして海彼の本をめでにけるかも」(「現代藝術家餘技集」我鬼抄・歌十六首」『中央公論』第三十七年三號、一九二二年三月、九〇頁。のち『芥川龍之介全集』第九巻、岩波書店、一九九六年七月、五八頁)がある。「大正日本(続)」四頁で「ここにして」は他に例を見ない表現」と記したのは訂正しておきたい。

(83) 森亮「訳詩の方法」二二〇頁。他にも第十九歌「草にし」、第二十四歌「明日をし」、第三十一歌「土星の座にし」、第三十七歌「今日の日し」、第四十五歌「我らにし」、第四十七歌「「無」にしをはれば」など。森は同様の古語として「ゆ」「しも」「の」「を」「がに」「ものか」「やも」「とよ」「ゆめ」を挙げている。

(84) 森亮「訳詩の方法」二二三頁。この歌は落合直文『萩之家遺稿』(明治書院、一九〇四年五月、二四九―五一頁)に「楠公の歌」の「櫻井の訣別」の節、全三十六行が掲載されている。奥山朝恭(一八五八―一九四三年)が作曲し、落合直文作歌/奥山朝恭作曲『學校生徒行軍歌湊川』(神戸・熊谷久榮堂、一八九九年六月)として刊行、一九二八年十二月にはビクターより『大楠公』、一九三五年六月にはコロムビアより『大楠公(青葉茂れる)』がレコードとして発売され、人口に膾炙した。また文部省『尋常小學唱歌』第四學年用(國定教科書共同販賣所、一九一二年十二月、四―七頁)にも「櫻井のわかれ」として掲載されたので、森亮も学校教育のなかでこの歌に親しんだ可能性がある。堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波文庫、一九五八年十二月、五六―五七頁「青葉茂れる桜井の」。なお「楠公」とは、楠木正成(一三三六年歿)のこと。足利尊氏との合戦を前に長子の正行(一三二四/二六―四八年)と櫻井駅で別れ、兵庫湊川で敗れて自刃した。

(85) 森亮「訳詩の方法」二一五―一六頁。

(86) 奥瑪開儼作/矢野峰人譯「波斯四行詩集」『媽祖』第十五册(第三卷第三號)、一九三七年十二月、一三頁。のち日孝山房私版『四行詩集』八頁。

(87) 「搏飯」は「摶飯」の誤記であろう。『禮記』曲禮上第一に「毋

摶飯（飯を摶むること毋かれ）」（竹内照夫『礼記』上、新釈漢文大系27、明治書院、一九七一年四月、三三頁）とあり、握り飯のこと。「側尊」は『儀禮』士冠禮に、「側尊一甒醴（側一甒の醴を尊く）」（池田末利譯註『儀禮』I、東海大学出版会、一九七三年三月、一九頁）とあって、特別に設けた酒樽を意味する。

(88) 矢野峰人「RUBAIYAT の研究（第六回）」『英語青年』第五十四巻七號、一九二六年一月一日、二〇八頁。同『Modern English Poetry（近代英詩評釋）』三省堂、一九三五年二月、一〇五―〇六頁。後者では「君居なば」の直後の読点なし。「大正日本（続）」一六頁。

(89) 奥瑪開儼作／矢野峰人譯「波斯四行詩集」一二頁。日孝山房私版『四行詩集』七頁。

(90) Decker, pp. 11, 129.

(91) 例えば北原白秋『抒情歌集　桐の花』（東雲堂、一九一三年一月）「白き露臺」の章の「V 白き露臺」六に「煩悩の赤き花よりやはらかに煙る草生へ鳩飛びうつる」（三四二頁）とある。ここでの訓みは「くさぶ」だが、『白秋全集』第五巻（歌集I、アルス、一九三〇年三月、一一三頁）では「くさふ」とルビを付す。

(92) 『萬葉集』巻三、四七五「かけまくも　あやに恐し　言はまくも　ゆゆしきかも　我が大君（後略）」（『萬葉集』①、二五九―六〇頁）。第27歌の訳詩にも「ゆゆしき議論」great Argument とある。

(93) 森亮「訳詩の方法」二一三頁。

(94) 森亮「訳詩の方法」二一八頁。

(95) フィッヂェラルド／森亮譯『ルバイヤット――オーマー・カイヤムの四行詩』「解題」一一〇頁。

(96) 自解で作品が挙げられている詩人・歌人は、伊藤左千夫（一八六四―一九一三年）、島木赤彦（一八七六―一九二六年）、伊良子清白（一八七七―一九四六年）、岡麓（一八七七―一九五一年）、齋藤茂吉（一八八二―一九五三年）らである。

(97) 自解によると、森亮訳の第二十二歌「今夏花の／新よそほひや」の「夏花」は、上田敏『海潮音』（本郷書院、一九〇五年十月）中のジャン・モレアス Jean Moréas（一八五六―一九一〇年）による『詩集』*Les Stances*（第一部・第二部、一八九九年）からの抄訳「賦」全七編のうちの第四編（Le premier livre, XIII）に「夏花のこぼれて散るも惜からじ」Laisse tomber la fleur（二二九頁）とあるのに拠ったらしい。この言葉は伊東靜雄（一九〇六―五三年）の『詩集夏花』（文藝文化叢書4、子文書房、一九四〇年三月）の標題に取られ、巻頭六頁に森訳の第二十一・二十二歌が題辞として引用されている。ただし伊東の詩集の中扉では「なつばな」と読んでいる。森亮「訳詩の方法」二一一頁。森亮「ある夏の思ひ出」『果樹園』第三号（伊東靜雄追悼号）、一九五六年三月、五頁（のち同『夢なればこそ』二一一―一三頁）。

(98) 森亮訳の第十一歌「糧」や第四十二歌「甕」、第四十八歌「美酒」は、いずれも有明がフィッツジェラルド訳第四版第12歌の訳に「美酒の壺、糧のやま」という形で使用した語彙である（「明治日本」九頁）。また自解によれば、第五十九歌で "Ramazán"（ラマダン）に宛てた「節忌の月」の訳語は、ロセッティ Dante Gabriel Rossetti（一八二八―八二年）のソネット "For a Venetian Pastoral, by Giorgione (*In the Louvre*)"（一八四九年）の有明による訳詩「威尼斯牧歌」」（『有明詩抄』岩波文庫、一九二八年十二月、一九六―九七頁）の冒頭「夏至の節忌」the solstice から借用したという。森亮「訳詩の方法」二二〇頁。

(99) 例えば第四十歌「飲みゑらぎしを」、第四十四歌「巣喰ひきほへる」、第四十五歌「かたへに臥やり」、第五十五歌「我が身纏る」など。

・「ゑらく」＝「笑い楽しむ」。『日本書紀』巻第十四、雄略天皇二年十月「歓喜き懐に盈ちます」。小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『日本書紀』②、新編日本古典文学全集3、小学館、一九九六年十月、一五五頁。

・「きほふ」＝「競う、争う、張り合う」。『萬葉集』巻第八、一六

四九「今日降りし　雪に競ひて　我がやどの」。小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集』②、新編日本古典文学全集7、小学館、一九九五年四月、三七四頁。

・「臥やる」＝「こやる」すなわち「伏す」。『古事記』下巻、允恭天皇「槻弓の　臥る臥りも　梓弓　立てり立てりも」。山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』新編日本古典文学全集1、小学館、一九九七年六月、三二五頁。

・「纏る」＝「睦る」すなわち「親しみまとわりつく」。『源氏物語』「松風」、「もの言ひ笑ひなどして睦れたまふを見るままに」。阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』②、新編日本古典文学全集21、小学館、一九九五年一月、四一五頁。

(100) 三好達治「燈下言（詩歌時評）」『新日本』第二巻四號、一九三九年四月、六〇頁。

(101) 亀井勝一郎「美酒と薔薇の詩人」『新女苑』第五巻十一號、一九四一年十一月、一三八頁。原文は総ルビ。

(102) 「大正日本」七―一二頁。「明治日本」七―八頁。

(103) 亀井勝一郎「美酒と薔薇の詩人」一四三頁。

(104) 森亮「ある夏の思ひ出」五頁（同『夢なればこそ』二一二頁。新字・新仮名遣い）。

(105) 三島由紀夫『十代書簡集』新潮社、一九九九年十一月、四八頁。のち『決定版三島由紀夫全集』第38巻（書簡）、新潮社、二〇〇四年三月、七八頁。後者では「ペルシヤ」→「ペルシャ」、「コロッセウム」→「コロッセウム」と表記し、「頽廃」とルビを追加。三島の蔵書目録中には森亮訳が含まれており、これが蔵書中唯一の『ルバイヤート』邦訳である。島崎博・三島瑤子編『定本三島由紀夫書誌』薔薇十字社、一九七二年一月、四二五頁。

(106) 島崎博・三島瑤子編『定本三島由紀夫書誌』四三一頁。

(107) いくつか例を挙げる。

・未完の短編小説「寶石賣買」（初出は『文藝』第五巻六號、河出書房、一九四八年六月、一四―二七頁）の冒頭に題辞として森亮訳第三十八歌の後半二句「見よ、星はいま空にしづみて隊商は／「無」のあけぼのに旅を進めぬ、急げかし。」（ただし、森亮訳原文では「しづみて」の直後に読点あり）を「オマール・カイヤーム「ルーバイヤァト」として訳者名なしに掲げる。のち、『寶石賣買』講談社、一九四九年二月（未見）。『決定版三島由紀夫全集』第17巻（短編小説3）、二〇〇二年四月、一七八頁（新字体使用）。

・「サン・パウロの「鳩の街」（南米紀行）」（『中央公論』第六十七年五號、一九五二年五月、一八五頁）ではリオの謝肉祭について、「四日四晩の陶酔の時の經過が、それがをはつたのちに人の心によびさますいひしれぬもの、快樂のあとの目ざめ、あのルバイヤットに現はれてゐる「死」の如きものでないとはいへない」という言葉がある。のち三島由紀夫『アポロの杯』朝日新聞社、一九五二年十月、一〇四頁（新字体）。『決定版三島由紀夫全集』第27巻（評論2）、二〇〇三年二月、五八一頁（新字体。「現はれて」→「歌はれて」とする）。

・一九七七年十月十三日付け、ドナルド・キーン Donald Keene（一九二二年生）宛て、インド旅行に関するバンコックからの書簡。「ジャイプールの Amber 宮殿では、オマール・カイヤムのルバイヤットの詩を思ひ、あれほどの歓楽のあとの寂寥を味はひました」。『決定版三島由紀夫全集』第38巻（書簡）、四三四頁。

(108) 注（68）で前掲の森亮訳『ルバイヤット』一四七―四八頁。再録＝『晩国仙果』I、二四一―四二頁。

［付記］

旧稿「大正日本（続）」で言及した『地上巡禮』表紙図版は、それに先だって雑誌『朱欒』第一巻二號（一九一一年十二月）の扉絵に「オオマア、カイヤムのルバイヤットより」として用いられている。

表１　堀井梁歩譯『波斯古詩四行詩集』とフィッツジェラルド訳初版・第四版の対応関係一覧

H	F1	F4	H	F1	F4	H	F1	F4
1	1	(1)	35	35	(36)	69	50	70
2	2	(2)	36	36	(37)	70	51	71
3	3	3	37	—	38	71	52	72
4	4	4	38	—	40	72	—	33
5	5	5	39	—	39	73	53	73
6	6	6	40	—	41	74	—	74
7	7	7	41	(47)	42	75	55	76
8	—	8	42	48	(43)	76	56	77
9	8	(9)	43	(45)	46	77	—	78
10	9	(10)	44	—	47	78	—	79
11	10	11	45	38	(48)	79	57	80
12	11	(12)	46	—	49	80	58	81
13	12	13	47	—	50	81	(59)	82
14	13	14	48	—	51	82	61	84
15	15	15	49	—	52	83	62	85
16	14	16	50	—	53	84	63	(86)
17	16	(17)	51	(39)	54	85	(60)	87
18	17	18	52	51	55	86	(64)	88
19	20	21	53	41	61	87	(65)	89
20	21	(22)	54	(37)	57	88	66	(90)
21	22	23	55	42	58	89	(67)	91
22	18	19	56	43	59	90	68	92
23	19	20	57	44	(60)	91	69	(93)
24	23	24	58	—	61	92	70	94
25	24	25	59	—	62	93	71	95
26	25	26	60	(26)	63	94	72	96
27	27	27	61	—	64	95	—	97
28	28	28	62	—	65	96	—	98
29	29	29	63	Preface	(44)	97	73	99
30	30	(30)	64	(Preface)	45	98		
31	31	31	65	71	66	99	(74)	100
32	32	32	66	72	67	100	(75)	101
33	33	(34)	67	46	(68)			
34	34	35	68	49	69			

＊表中の「H」は堀井梁歩譯の歌番号，「F1」はフィッツジェラルド訳初版，「F4」は第四版の対応する歌番号を示す。
＊「—」は初版に対応する歌が欠けていることを示す。
＊「Preface」は歌番号が付されず，フィッツジェラルドの序文中で引用されていることを意味する。
＊初版と第四版で対応する歌は並べてあるが，このうち，訳語の選択などから梁歩譯がいずれによったか判断できる場合には，関連性の低い方の歌番号に丸括弧を付した。

表 2　堀井梁歩譯『波斯古詩異本留盃邪土』と H. B. Lister, *Apochryphal Rubaiyat* の対応一覧

H	L	H	L	H	L	H	L
1	1	27	31	53	60	79	86
2	4	28	32	54	61	80	87
3	3	29	33	55	62	81	88
4	5	30	34	56	63	82	89
5	2	31	35	57	64	83	90
6	6	32	36	58	65	84	92
7	21	33	37	59	66	85	93
8	16	34	38	60	Emerson	86	94
9	Cowley	35	39	61	67	87	96
10	7	36	40	62	68	88	97
11	8	37	41	63	69	89	99
12	9	38	42	64	71	90	100
13	10	39	Emerson	65	73	91	Bodley
14	14	40	19	66	74	92	101
15	13	41	43	67	Emerson	93	102
16	15	42	45	68	75	94	103
17	12	43	51	69	76	95	104
18	11	44	52	70	77	96	105
19	22	45	49	71	78	97	106
20	24	46	50	72	79	98	107
21	25	47	47	73	80	99	108
22	26	48	48	74	81	100	109
23	27	49	54	75	82	101	110
24	28	50	55	76	83		
25	29	51	56	77	84		
26	30	52	57	78	85		

＊表中の「H」は堀井梁歩譯の歌番号，「L」はリスターの『ルバイヤート外典』の歌番号。ただし後者には番号は付されていないので，並んでいる順番に 1 から 110 までの通し番号を私に付した。
＊「Cowley」は「カウル譯より」，「Emerson」は「エマーソン譯」，「Bodley」は「ボドレアン稿本から」と梁歩による注記があることを示す。
＊『ルバイヤート外典』全 110 首のうちで，堀井訳に使われなかった歌番号は以下の通り。
17, 18, 20, 23, 44, 46, 53, 58, 59, 70, 72, 91, 95, 98（合計 14 首）。